

6308

特

8



四季如耶全

新 小 説 行 發

# 四 季 之 花

## 目 次

● 美術息子 (完)

插 畫

三 野 味  
中 川 芳 月

● 逢 阪 (完)

插 畫

仰 天 子  
田 口 年 信

● 指 一 本 (完)

北 野 生

● 冷 熱 一 紙 (完)

苔 ゐ ろ も

以 上



明 文 館 發 兌

美 術 息 子 (一)

美術息子(上) 三味道人 関  
横野半醉著

給書展覧會、并に諸先生、令嬢席上揮毫……来る某日晴雨不詳、平野街卯樓に於て、と清朝風の活字にくみこみ紅唐紙に印刷なせる唐線香のレットアル擬いた引札、高麗樹邊の骨董商の店頭に貼り出すと同時に京阪間の紳士豪商の手許へもヒラ／＼と舞ひ込めば新聞紙の雑報にもチヨロリ顔出しが濟むと幾日敷を経て、その卯樓の大堀造りの入口へ縦つぎの洋紙に同じことを大書してタマリと貼り出せしは正に開會の當日にして時候り十一月第二の土曜日とな好時節、正面玄關の下足札既に半敷は履ものを捕縛してまづ一ふくと下足番は一息つぐ處へ車輪轟々二輛の腕車式寄真近にカマリと轆轤を放てるど均しくホイと飛び下り同行の一佃を視返へりもせせ乾娘に延かれて大街立の影へ街と入りたる年紀二十八九の富裕家の息子様らしき男は伏

見町邊の紳士湖西三郎兵衛の男四郎吉にて雅名は満月と呼ぶ即ち本編の立役美術息子なりけり、跡に居遣りて満月と自分の履ものを下足番に預け受附に向つて二葉の名刺を示し、オヨ／＼お愛さんにか橋さん相も變ら申嬢婿なことで、杯と捨書詞あつて全じく奥へ通りし三十五六とも覺しき黒羽織にギミ／＼扮装の男は全明の満月の借家に住める谷川殿といへる齒科醫にて著者が御披露申すまでもなくこの満月の取巻筋と識られたり、全樓上の大座敷の周圍はヘタ一面に新古の繪畫をズラリツと羅列せり、爰に至ると満月は得意満々つと張臂のまゝ澄し切つて繪畫を熟視なしつゝ中音にて啜やけるの我こそ美術家なりと群集の紳士令嬢に批評の周到なるを賞賛されんといふ思慮深き胸運の擴さこそ千尋の大海の如し(満)ホホオ／＼小栗宗旦の山水か之れは感心廣岡さんの所有か成程佳品はよい哩」と廣岡の二字を證據に絶品だと斷定を降せるは玄番が昔秀才の首級を賛成するに似て谷川は噴飯たいやうなれと爰が無家賃同様に住める年貢がはりと顔を顰めながらの

お附合と息子とののは毛筋程も気がつかれど(満)この  
 横貼は宇治川だナ中川若月か之れは上出来」と賞賛せ  
 しとさ背後に俯止し寶茶翁が荷を忘れしやうな老人が  
 、この宇治川は楚か本年の御歌會の御題に寄せた趣向  
 で御座りましやう」と言ひ了るを察たて(満)エ成程本  
 年の御題は宇治川でしたかしらッ」と迂ッ濁り途惑ひ  
 されて谷川の冷ッとせしが(谷)如何にもこの宇治川は  
 藍石の邊りを描たのですから如何にも水石契久」と  
 被せかけて宇治川にお茶を濁し十歩ばかり那方へ満月  
 を連れ退り愛なら風上だからまづ一と案心と思ふ間も  
 なく満月尙憶りままに口をむがつかせ(満)ホ、オ一飽  
 はしい傾城の圖だナ……落顔は豊春とあるが豊彦の門  
 人ぢやナ併し何處やらの新聞に契情の沿革の附録が出  
 た事があつたが那の圖に對照すると余程古いやうだが  
 「それは貴郎古い等その豊春といふのは東京の浮世繪  
 に有名な歌川の楚か始祖にあたる豊春ですものアハ、  
 ハ、ハ」と軽く笑ひしは誰れぞと谷川も満月も一時に  
 腰をふり向けば相も廻らぬ寶茶翁なれば、ホイまたか

と谷川の瘠せる思ひに堪へ兼て(谷)満月さん畫幅は跡  
 で寛々觀るとして余り雑踏しないうちに食堂へ這入ら  
 喫茶室へなりとも往て一寸休憩は如何です(満)サア先  
 生は失敬ながら美術心が無いから不可」その美術心が  
 害をして味噌の付け通しだと思つたが今暫らくの辛抱  
 だと誰々また足を進ませれば(満)成程花鳥風月の三幅  
 對とはよくある圖だが誰れが描いたか……ハア、仙嶺  
 といふ名前は西京の梅嶺の師匠の先祖とでもいふのか  
 しらッ」とハッキリと言ひ兼るはまた味噌を付けるの  
 であらうと谷川この道に暗らいだけに傍杖のお相伴の  
 一層辛らければ熱と畫面を諦視しに夫れに添ひたる詞  
 書ありて明和初年の時代にして應舉が三拾二年の時  
 筆になりし履歷の證明ありければサア大變と袖を扣へ  
 (谷)満月さん仙嶺といふのは梅嶺の師匠なんテ大違ひ  
 之れが應舉の前揮毫ですモウ貴郎は無言でイエナニ批  
 評は歸宅のうへとして唯説るだけにしては何うです」  
 と低聲に注告されと美術先生夢中になつて居れば能く  
 は耳柔へ入らぬか(満)フウー能阿彌の寒山拾得か……



竹花の庭 春草の如し  
 昔こそは 月夜の影に  
 夢もなき 花の影に  
 夢もなき 花の影に



何うも愛等が美術だナアールと無上に感心して居るに  
 谷川強腹になりて少しシレ込み此度は同士うちと出か  
 け樂屋から火を出してやらうと(谷)満月さん能阿彌と  
 應舉の時代の何うなります僕に繪畫は一向不得意な方  
 で」と旨く水を向けしとは氣づかき谷川にない甘い太  
 鼓をうつて呉れたと満面の圖を崩し(満)ソリヤー大違  
 ひ大變の違ひです」と取敢ぞ答へしかどその跡は何と  
 答へてよいかカラ暗黒なれば、ソリヤー大違ひ、を勝  
 関として疾くこの席を引揚んとしたれど谷川は胸氣に  
 なりさうはさせじと草摺曳をはじめ(谷)大變の違ひと  
 は何う違ひます」とダメを押され(満)ソリヤー能阿彌  
 の方が遙かにソノ……」とドギマギした處へ口の減ら  
 ん能辨家が傍らより一人現はれて谷川に向ひ、能阿彌  
 と應舉は能阿彌が大變に古うございます、どの横槍を  
 ヘシ折らんと(満)ハ、ア、左様々惠信僧都あたりと同  
 時代でしたらう、イーエ何う致して惠信僧都の源平の  
 頃で能阿彌は足利時代の半度ごろデ……まづ順序を推  
 して言ひますと、小野篁、企岡、智證、わたりの遙か

に古い處は猪置き足利の代に至つては周女、如拙、兆  
 殿司、小栗宗旦、同じく宗樹、夫れから能阿彌、藝阿  
 彌、相阿彌、曾我蛇足、足利義政、企じく義持、雪舟  
 揚月、周耕、秋月、狩野元信、同じく正信、まづ愛等  
 が著じるさ部類で夫れから豊臣徳川の世に移りて、狩  
 野永徳、或の探幽、常信、安信、周信、淇海、宗達、  
 光琳、蕪村、大雅、岸駒、應舉、吳春、と延べつに興  
 舌りたてた立派さに満月は呆氣にとられ之れで僕よ  
 り一まい役者が上級ぢや恐れ入つた美術家もあるもの  
 と舌を巻いた大閉口、谷川も俱に炬にまかれて黙然た  
 り、満月は乾度思案しこの人物を師と仰がば何處へ乗  
 り出してゐ恥はかくまじ那の男の名前を問ひ名刺を交  
 換して交際を結ぶとせしやうとさし俯伏た顔をヒョいと  
 掻ちぬぐればその男何處へ往つて了つたかドロンと消  
 へて影もなし、ア、失敗たひかふの黒羽織がさうでは  
 なかつたか知らず谷川君來たまへ、と少し小足早に往  
 つて視ればその人でなければア、違たど佇止まりし一  
 室の承押に「映飯席」といふ貼ヒラを谷川が鋭く見認め

満月君繪も盡ですがモウ腹飯は如何ですと促され、  
 乾娘銚子を選び先客笹折を提げて退散するといふ雑沓  
 の宴席へこの二個が澄して入来りし椽側の邊りまでドツ  
 と動揺めく一と群れの笑ひ聲と共に木彫の肘ごの、や  
 うな白鷺の老翁玉子巻をバク／＼喰いながら、アハ、  
 、と大口開き座右の膳に着きたる黒羽織の男に向  
 ひ、貴下は何でモカアノ伏見町の氣ちがい息子を識  
 らせにですか、イーエ此方は識つて居りますすが向ふで  
 は小生を識りませんが楚か満月とかいふ俳名で八千房  
 の催しの時の副評の巻の提灯持に一二句抜けてありま  
 したがイヤモウ齒の浮くやうな句で……那奴が得意然  
 どして畫工のお講釋をトンチンカンに演て居ましたか  
 ら這如何なる答へをするか萬一夫れは訝しいと詰つ  
 て呉れたらその時満月の無茶苦茶を言つたことを激し  
 く退治つけてやるべしと九鬼團圓書頭の美術上の演説筆  
 記の中を記憶の儘の口から出任せに彫刻師や畫工をチ  
 ヤンボンにして故意と饒舌り散してやりましたら満月  
 のその人物を孰れも畫工だと心得て居る容子で唯ボン

美 術 息 子 (中) 三味道人 関 横野 半 醉 著

ヤリ小生の面想ばかり祝語で居りましたアハ、ハ、ハ、  
 夫れに可笑しいのは彫刻の専門家を評するに那の仁は  
 楚か團山派でと言つた時の笑しさを辛抱するのは大苦  
 しみでしたアハ、ハ、ハ、と調子に乗つた彫口に圖らそ  
 衝突した満月は手前味方の谷川にすら面目王を踏み潰  
 しその席を早々逃げ出し繪畫の揮毫席へ來りて尻を据  
 へけるに玉木お蘭といへる束髪の妙齡の美人四條風の  
 長春を扇子に描き満月を依頼者と人違ひして面はゆ  
 氣に莞爾として涉たせしにぞ満月汪潤と掌を出したか  
 邊かに受ける收め兼ねお蘭の顔のみ打證りぬ

はる、お蘭の手づから興へし扇面の長春、此畫がこの  
 佳人の筆になりしと思へば疎がさの淡彩却つて趣むき  
 を備へその濃淡の墨色瀟々洒々として風韻紙に溢る、  
 に、恐怖して掌にうけし満月、惜しまれて無難とら放  
 ちかねしがさりとて卑劣に收めぬならずと躊躇しを谷  
 川傍より口を出し、エーこのお扇子は藏さましても……  
 ……と誰をかけられお蘭、史は爰に至りて人違ひなるこ  
 とを推したる風情なれや邊りに委託せし人の居らざる  
 容子なれば、只ハイと臆氣に答へたり答へぬかと思ふ  
 間に早やさし俯向きしは満月先生畢生の幸福なりとや  
 思ひけん今日の従前の失敗はこの畫扇一本にて十層倍  
 るも挽回せし心地せられて頼みに埋卵機を辞しある料  
 理やにて小酌なしその日は谷川と袂を別ちしが忘れが  
 たきはか蘭女史の温雅なる風采その翌日も例の谷川が  
 訪ひ來りて諸共に膝を交へて談話數刻に及びし、他な  
 らせ徹頭徹尾お蘭の噂、その結果が那の少女を新婦に  
 迎へたしとの託宣に谷川一識に及ばせしてオツと谷込  
 み(谷)イヤ宜しい其處までの御熱心とあれば斯様も奔

走には至つて無得手な谷川なれや然然勇を鼓して媒介  
 者の任に……即ち出来得べきだけの事は盡しませう  
 がこの結婚といふ奴と汪潤には手を出せませんから尙  
 宜しく御意考をなさるに若くはありませんテ」と一旦  
 去支度した模倣蛇皮の捲煙草巻を袂より取り出し反身  
 になつてバク／＼吹かせば満月、古渡來更紗の座布團  
 より中央乗り出し(滿)左襟一最も爾うですがアノ少女  
 の唯々面相の可憐なばかりに遂ひフヲ／＼と懸着した  
 といふ理由ではないのデ……エー夫れかと言つて彼の  
 者の履歴上または目下の經濟の可否に據て貴下の努力  
 を無効に歸せしめるやうな冷淡なる考へでは當しみな  
 いのですが唯慮れるのは那女の嚴父なり慈母なりが非  
 常に惡黨であつた處女を餌喰に客でもとらせるとか同胞  
 に全臭味のやうな者があるといふやうならば無論お蘭  
 りですが履歴や活計かたの良くない位は決して構や  
 しませんのです……イーエ貴下は湖西の腰懸かと言ふ  
 て下さる御注意は厚くうけやすが現に小生の實兄を御  
 覽即ち湖西三郎兵衛の相續人三十郎の先妻の死跡故に

正位に直したとよらへ曾て陸軍某大佐の妾となりまた引眉毛の二度の勤めに北新地から小籠といふ前名復古で現れたのを兄貴が一時妾に囲ふて措たのが今では母家の御察人況んや小生の部家住といひ縁あらば妻にいやうといふ蘭女史は美術家の中にも尤も尊むべき書工なれば術斯々の理由で阿兄や親爺へ相談をすまばコリヤ無論のちやらうと小生の信じて居ます

(谷)ハイ成程別段磨き砂賣だの寸燐の筈を貼りに通よッて居る赤貧の娘といふではありませ。から相當な暮しをして居れば強て差支へもなからうとは考へます

が玉木蘭女といふ書家の餘り耳にもしませんやうですから能く考へなざるが宜からうと言つたのでが...

エート斯うしては何うでしやう湖西さんの玉木の宅の近傍でその内部を開拓とぞか或は書工社會の方で問合すとした處で這的得てして依估煎負をしたり偏頗な答へ杯をされますと將來へ大害を遺しますから間接の探聞は第二として實地の内部は何様都合か両親は奈何なる人物か貴郎と御同道で玉木の宅へ押出さうぢや

探聞人が前日から對ておやつしとは些ッぞヤケますナ(谷)アハ、ハ、ハ、ハ、蘭嬢のこといへば今うらヤケルの消ぬるの被仰つては嗚呼前途が思ひやられます子」と谷川は串越口をさくながら其の日はそくくにして歸宅なしつゝ翌朝疾く起きて玉木の住所を探り時間を圖つて湖西方へ赴きしに今日ハ噴れぞと満月の他出の身支度方さに成つて待ち構へ土産の菓子折まで取揃へ帳場の腕車二輛門戸前に駐め万事整然たれば谷川少しく咳さつゝ満月と座を對し借玉木の住所は今朝書工の若月氏に屬て探りましたが何ぞも越後の新潟の士族とか慈母は病死したか居ないさうで父といふのは玉木傳也と申して風一といふ雅名で圓山風を少々描くさうですが久しく西京に居て此頃出坂して東成郡の清堀村千貳百九拾二番地が寓居でこの風一翁の阿兄といふのが以前西京の玉木物平と言つて可成りな商家で大變の抹茶金太郎ださうでその骨董物が惣平の死亡後にスツカリ流れ込んだとの事で夫れがために風一の宅は相應な財産家だとかいひますが未だ一面識もな

ありませんの...イーエ夫れは極りが真くないと母間が悪いとか被仰るのはまだ御思接が若いといふ言はざるを得ませす昨日アノ佳人に揮毫の扇子を貰つた儘で打撲つて措く理由のものでなし別してこの情實もあれば他日小生が表面の全權公使に向つても極干か体裁上に關係することですからまづそのお禮券を懇親を願ふために今日は出かけましたとか何とかいふて一寸立派な菓子折でも携へて往つては何うです夫れが程度暗に見合といふ都合にもなりますから(満)成程々々爾して例の美術の談話でも遣つて居るうちに大抵處女なり両親の氣質が識れませうからイヤ同感です夫れでは今から往くとしませうか(谷)之れは恐れ入る貴郎の何うも決心が速すぎますな今日は午後に少々自宅に來人もありますから夫れでは明日...イーエ決してサラス杯と怪しからんアハ、ハ、ハ、其様ことはありませんがその來人の俗事を濟せたらうへで髯を一つ剃て措きたいのですこの通り顔がムツムツしますから(満)ソイヤア一瀧泊な先生に不似合ですなこの花筆をさし措て

ければ第一肝腎のお蘭嬢にも遭遇たことがなく過日の繪畫展覽會にも不参をしたから其様美人のあることは一切識らないと言つて居りましたが兎に角住所だけは突き留めました」と悠々と珈琲を啜りながらの復命に満月は早や尻をムツつかせ(満)夫れは色々手數で恐縮でした尙漏れたらお咄しの歸宅のうへとして若輩の人物の來ないうちに直ちに押し出させようといふより早く身を起して先きにたち戸外へ出たりと思へば手ばやく腕車に飛び乗り居れるに谷川はイヤハヤ勢急なことだと咳きながら小僧と二た役の菓子折と合乘にて、ハイゴンサイと腕車の轆を東位に向け疾風の如くに馳せければ程なく清堀村に到りつゝヤツと尋ねてか風一の寓居の茶戸に、玉木蘭女、と記せる標札の文字さへ慕はしく先導者たる谷川が極りの悪るさうな案内の乞ひかたに満月忽地帽子の縁の裏草を冷汗に浸せる程もなく、何事さまですかまづ此方へと鹿の毛革の袖無し羽織を被りたる白髪の薙髪の老人瓦燈口の紙門を颯と開き立姿は、ア、鍋蓋が持たせたいと満月

一目して洒落たき處なれど谷川は手首のシャーツの鈕を弄りながら何やら感動に述べ聞ゆしかば唯その首尾をどうかいひ居たり、この老人爲落な質と見ゆ、爾うおむづかしう被仰つては困ります御覽の如き乎狹な住居をぞから鬼にかくまづ那室へと戸主振りたる挨拶は問ひせど識れたお蘭嬢の父なることはその容貌の何處にか目的の佳人に似たるこそ争へぬものぞと満月は胸を跳らせつゝこの老人に延かれて奥坐敷に座を占め主客一順の挨拶のうちに、コリヤ〜お眞神盆をさし上げんかと老人の命令に、ハイ×厨庵もとにて少女の聲は惜こそお蘭嬢ならめと満月の次席の谷川と顔見合手早く衣紋を繕い、問ひもなく胡蘿蔔のやうな指先で屈強な下女が鯨手の眞神盆を持ち出たるに此方は大に的が違へど下女を使つて居る程なれば阿兄も安心するだらうとハイ親戚の氣もちで居るをかし、谷川は土産品の披露に何う法螺を吹き立てたか戸主風一は親箱の半切の端に何やら短文に認め下女に渡させしと思へば暫らくして杯盤の現はれ出しは程近き城内にて午初と懸

する頃にて客の二個は素よりなる口主個風一思つたより却々の強上手に自分から飲でかゝるといふ剛敵所謂三人上戸と来て居れば偶然の小宴漸次酣はに及びしかど満月の主眼とせるお蘭嬢のこの席に出ざるは何處かへ出かけしにやと思へど主個の方から言ひ出されば殊更に尋ぬるも跋が悪く、エ、谷川も氣の無い男だモウ何とか火蓋を切つて呉れさうなものだのにとザレが来る程飲ひ酒が胸もとに交通遮断をされて直の廉位ヲム子を呑だやうに、ゲブツと厭な暖氣を催したれば、ア、痼疾になりさうだ美人は何處へ往つて斯様に歸りが遅いのか一休妙齡の處女をボク、〜一個で出すのは能くないことだ杯と余計な氣苦勞までも背負て起ち、襟側治ひに小用に往んと鍵の手の廊下を通ると大きな圓窓附きの三疊敷の一室あり、ハ、ン之れがお蘭嬢の揮毫室なるべしと鑑定すれば何となく裡ぞ床しく思はれてその圓窓に閉切つたる指孔ほどの障子の破れより窺つと覗き覗るにふツさり束ねたる束髪の色艶妙にうるはしさこそ漆をぬりしかと疑はれ箱二時下りとは

いへ平常着に過ぎた紫地に箭がすりの縮緬の被布を破りて頓貼の絹地向ひ餘念なく炭燵を宛て居れる婉然たる少女は即ちお蘭嬢にてその肩のわたりの婉然さ、その居るまゝの繕ろはすして温雅なる、高貴の姫さやとして愧かしからぬ尤物に、ア、美術々々と満月思はず低聲で叫びしをこの佳人に感じたるか但しは障子に映れる影坊子か夫れかあらぬか少女は軽く面をふり上げたる素顔のうつくしさの塚卯樓で拜みし時の極彩色にも増して光絨地に應翠の一筆描きの宮嶽を評すべき絶品に満月は羨つとして髪の根も引締めブル〜震へが出る心地して思はせ後へ二歩三脚地踏ぐ椽板の音に駭かされ誰か蘭鏡玉ふにやと面は氣に赫らめる顔を再びさし覗けば以前の宮嶽に生肌脂にて夕映を彩色せし風情に今は酔へるが如く恍惚していよ〜其處を離れかね、ア、美術々々とまたウツカリ咽喉もとまで込み上げる折柄此方より主個の聲、アノ便所はか分りになりましてすか……



冬  
まほりふ  
おたけいろう

あつ園



美術息子(下)

三味道人聞  
横野半醉著

いさしむ不意に酔をかけし主個の聲に湖西の次男満月  
は一心不乱に覗きこみし四窓の神へ精神を措き去りに  
して澁々素の宴席へ立戻れり、戻りて見ればまた幾鉢  
かの下物既に座上へ現はれ、尚にくだらぬものばうし  
ですが切望召わがつて「風一の蕭然な行選より、同  
席の谷川は唯飲食主義に(谷)モシ湖西さんお汁の冷な  
いうちにおどり上げは如何でしやう折角の御心配です  
から」と雨虫を覗み慕のやうにまろく座を構へて早や  
箸をつけはじめぬ、満月は慈い顔に懸娘のふ蘭の容姿を  
関望しゆゑに双の瞳子は執着のひら雲に掩れしか吸物  
椀も盃洗も紙門の給の七賢人も悉皆に蘭嬢の面相に見  
ぬその身のやはり圓窓の裡にておらんどこまやうに問  
つ答へつ咄してゐる意もちなればなにを喰へど無我夢

中、ア、素敵に洗い冷たい清酒だと煎茶の呑みのこし  
をガブリと引ッかけてより稍本氣沙汰に復せり、され  
どおらん嬢のことはいかなこと忘るゝひまのあらざる  
にぞ爰でこそ例の聴かぢりの高慢三昧、これがこの  
先生の美術息子といふ雷社を轟かせた専賣特許なれば  
この店を出した筋さきに衝突ッた者ハその日の文珠悪  
日と心得、ヘエ成程デスカと受太刀一方に腹を括つて  
居るのはかなし、平素すらの病のチヨク／＼起りて  
番頭手代などの相手番をウンザリさせながら大學校  
の教師が生徒に化學的の講義でも傍聴させる程の大得  
意なるに況してこの席では目的の佳人に美術博士のは  
をを講らしめむとの計策なれば突然と一調子張り上げ  
(満)風一先生失敬ながらこの磁子の磁器は實に結構で  
すナ(風)イーエ何ぞざりますか實は西京で致しました  
愚兄が愛して居りました品で」と一面講の此方に片膝  
はぬ老人の實直、こんな内翁なら處女を餌食に一す拾  
圓だけ杯と悪い耳は聞せまじと自分勝手胸算用、傍  
座の谷川は、どうです湖西さん一分一厘違ひますまい

拙者の探訪の緻密なのは新聞社も徒然しやうと言は  
ぬばかりに満月の羽織の袂をキユツと曳く、此方は酒  
の催促かと顔しかめつゝ大盃をグツと引て谷川に獻し  
件の磁器を兩掌で捉あげ(満)ナール程祥瑞の香形の向  
附と申して美術家の咽喉をならすだけに何も妙です失  
敬ながら幾個お所持です……五まい……へー好いお器  
物ですナ……へー成程固足は福銘ですか……イエ決し  
てこの福といふ字が祥瑞五良太輔の字名でも變名でも  
ございませぬのですこの五良太輔の説は種々に言ひま  
すが素より御老人杯はこれしきのことば先刻御承知を  
もごぞいしやうが小生の記憶にこの五良太輔は元  
來勢州松坂の人で全國のヱー飯野郡黒部村の産で性を  
山田、名を則之とか申したさうですが久しく清國の福  
州に遊歴して居つた頃に青華の磁器の秘術を充分研究  
して若干の釉料……ソノ釉と吳須杯を携へてたしか永  
正九年に歸朝しまして肥前の有田の者へその秘傳を授  
けましたは肥前の今利で陶器窯を築きまして自う巧み  
に種々の磁器を製造しましたさうで(風)へーどうも

御名説(満)然れども大きな器は出来なかつたさうです  
が夫の固足に福銘の書き入れてあるのは即ち福州より  
超因したるために福銘を用ゐたものであらうかと想像  
されます(風)何さまさうかお聞れませぬ手前杯は  
晩年に及びまして大變に記憶が薄くなりまして祥瑞  
は一代限りで男はありませぬでしたか(満)左やう五良  
七に五良八といふ二名の徒弟が五良太輔の遺傳を受つ  
ぎ専ら陶器の製造に骨を折つたさうですが何ういふも  
のか孰らも世に行はれなかつたさうです」と訝う澄し  
切つて風一の杯器をうける容体は近年になら満月先生  
の大出来しだに谷川もフラ／＼と釣り込まれ(谷)こん  
なお話しになると小生杯はか宗旨違ひで問題を述べて  
伺ふことさへ不得手な方ですが陶器師に仁清とか言ッ  
たのがありますさうですが矢張祥瑞と全條の製造です  
か(満)夫れは大違ひです仁清は野々村仁清と申して尾  
形光琳と同時代な仁で西京の御室に陶器窯を開き光琳  
の畫を描く仁清の磁器を造ると言ッたやうな理由で彼  
の有名な立鶴の茶碗、繪御本、曆手の茶碗杯を初代の

美 子 衛

錦光山……左やう栗田の錦光山宗兵衛がその秘傳を譲りうけ可成りに製造したとか聞て居ますが近來は栗田なり五條坂なり貿易向さばかりを專一とするやうですから惜しいかな陶器に風韻といふものが無くなりまして……ナニ清水六兵衛ですか左様々々風一先生のお説の通り彼の人は何處までも六兵衛焼の暖簾を纏へる益々燦んにやつて居るのハ感心です尤も親の六兵衛よりか當今の息子の方が工事に意匠があるやうです……エ成程清風興平ですか之れも前の清風よりか當時の興平の方が萬事に活氣があつて妙です、左やう々々眞清水藏六之れは惜しいことをしました寂もの、摸造十藏六に限りませす五條坂も十四五年以前は龜亭、香齋、七兵衛、興三兵衛、龜塘、一等降つて尾形周平、清水五郎八、この五郎八と周平の二個は安南、伊良保、乾山、繪高麗杯の摸造に妙を得て居つたさうですが何うも不可なくならましたか五郎八の方は當今はどうですか確かなお答へは申せません今日に至つても相替らる燦んなのハ三年坂の幹山と高臺寺の門前の眞葛でしやう、こ

の眞葛は當時横濱へ引越ましたとかいひますが」と止途なく云ひ並べた陶器師の人名、このうへ何の位も擔ぎ出すか殊にその銘を傳へては四十七士も宜しくといふ十二段返しに延つ幕なし、箭つき速やの達辯の不審識と百中百的の大あたりなれば、オヤ々々これでは此中の繪畫展覽會の失敗とはガラリ人間が變つて居るやうだ、と内閣の位地又立つた谷川すら舌を卷き、ハテこの教師は誰れだらうと首を捻りつゝ、ハ成程此頃湖西方に食容して居る梅山とかいふ揚弓やの行燈のやうな名前の男は酒に酔ふと漬物桶の塵石を疑ひをうけさうな腹なごを描きちらして居る西京の五條坂の陶器の番工の喰ひ詰ものだと聞たがいま湖西が得意になつて饒舌つた材料は彼奴から出たのだなヨシヨシ歸りにはこの種を討つて島の内の富田屋でも寄らせてやるべし、と際遠い處で愉快の許書とは谷川も如在のな男なり、満月は呼吸も絶え大演説に今まで内攻させた酒は一時に發し能いこゝろもちに酔ひ(満)何うもお住居結構」と室内を見まはす板床の柱によせかけた

美 子 衛

雲琴に目をとめ(満)この琴は先生のお思ひですか(風)イエナニ娘が折々弄つて居りますがイヤモウお耻かしことと「と謙遜するはさうやら一曲聴せたまうな主個の口氣はふ蘭嬢をこの席へ釣り出すには好機會と、イヤこれは奇妙是非々々御老人お願ひですから夫れはハヤ何よりの御馳走と満月と谷川が交るゝの所望に風一の座を起つて、左程又仰せ下さりませれば何彼短値にやらせませしやう素より曲の拙な處が却てお笑ひ艸になりませしやう、と主個は笑し氣に納戸へ入りしが暫らくありてか蘭嬢の手を携へつ座に着さける姿を満月が偷み目にチラリと視るに今しがた圓窓の裡を覗きし容子とは衣服も替り蓋らふ貌に薄くれなるぞ染めいだしニコリと笑ふ愛嬌磨のポト々水の垂りさうな近優りのする尤物を今こそありと拜されしにぞ満月はフムと肩で吐息をぞつくのみなりき、お蘭は肅然に両手を支へまづ上席の満月より挨拶をなさんづ身構に、イエ々々お嬢さん御挨拶はお廢止としてこの通り大醉して居りますから早くお琴を願ひませしやう、と

谷川が迫りたてし髪に座敷が理に入つてハ折角の琴があくらになりはせぬかとの要心とは識られたり、お蘭は父風一と何やら私語つゝ頓て膝下に引寄せし八雲琴を掻きならせるその音いろのさやかにてこの家理に澄みわたり、細咽の音律玲瓏として珠を轉ばすが如き、すいやかな靈妙に此方の二個は恍惚ボカンと氣をのまれ、若し辨才天女がこの姿を琵琶を奏し玉ふと之れはどにはと谷川がウツカリ煙管を憂りと落せばこの時琴は畢りたり、これと同時に氣の着く満月、是非いま一曲と岩代めかした乗地の所望を長居は怖れと谷川がよき程度に幕を切りその日は綺麗にひらさとして兩個の程なく家居に歸りぬ、その翌朝満月の疾く起き出で谷川方へ寐込みを掛け、サア谷川先生いよ今日では表面の全權公使だサア往つて下さい……ハテ何處へ、とは氣の乗らぬ先生だ無論お蘭の處へ往つていよ々々お嬢に下さるか下さらぬかの處を、テナことを野暮らしく改ためて言ひせるだけが恨みだせサア早くだぐ之れが今日の土産ものだ宜しかナア先

生支度をし玉へ早くだぐ、と風下の近火に煙を引ンめくるやうに促迫られ谷川直ちに満堀村へ押出せしが釋もあらせき満月の宅へ顔色變て馳歸り(谷)満月さん大變です實にどうも大不出来し言語同斷」との苦笑ひに満月思はき座を乗り出し顯のあたりを鐵道の湯氣に觸れ(滿)アツ、何うした谷川さん言語同斷とはハア分つたアノ娘には古風らしく許嫁の男子でも(谷)ナカナカいひなづけも澤庵もわりやアしませんアノお蘭はソノ大のド、吃ですエ、小生まで吃になつた吃なものですから逆も縁附は難なしからうと自活の出来るやうに書を習はせたのださうです(滿)ヘー……だつても昨日あれ位(美)器で八雲琴を(谷)サア夫れが所謂吃の小唄といふ奴デ(滿)成程さうでしたかチョン……これは大失策」折柄庭の板塀越しに聞ゆる出稽古の淨瑠璃「拙者めを遣はされて下されませ、申申シさりとては御承引ないか、下、吃でなくばかうはあるまい、エ、ハ、ハ、うらめしい、ノ、咽ぶるをカ、かきやぶつてのけたい女房さる」(滿)なんぞ面白くもね(吃)又の義太

夫か(谷)之れは偶然エ、苦々しい」とその後の笑ひをぞなしたりける (をばり)



逢坂 (上)

(上)

坂

武田仰天子



嗚呼盛んするかな、お煙草盆の鼻垂らしが、島田縣の艶娘に變するも、随分速かされど、この邊の地形の變化の速かき。今より五年以前、我等いまだ大川町の代言人横間先生の塾にありし頃は、この官民俱樂部

は固より野中にて、商業俱樂部もなく、漁車の行違

もなく、車を來るには、遊行寺の周囲ぐるりと回つて、よろづ不便勝ちの土地なりしに、昔日の畔道垣々たる大路になりて、赤い襟の姉さんが田植歌うたふた田圃で、音楽會舞踏會を催すやうになりしと。これれも昇平の餘澤、有形の進歩早いものなり。それに就いても、我等が學業の進歩の鈍さ。殊にその辻合にある爛糜堂の事を想出せば、この海から直の風が打通しの三階に居ても、背中はびしょ濡れなり。時は是れ明治十八年、我等十九歳の若盛り、丁度この頃のやうに殘暑の時なりし。天王寺村に訴訟事件ありて、我等先生の命により、談じに行きし戻路、太織木綿袴知かの單衣に、大幅金巾の一丈物、腰の當りへ三巻半をき付けて、汗水たらして一心寺の坂を下りし頃、丁寧に風を添ふての俄雨、枯槁汲む兄の悦ぶに引換へて、我等は狼狽へ、やうくのこと、件の爛糜堂へ駆込みてはッ息。袂なぞ捲つて居る所へ、泰清寺へ参詣したのか、片手に両面の編傘、片手に絹上布の襪高か、けて、緋縮の蹴出し風にひるかへ

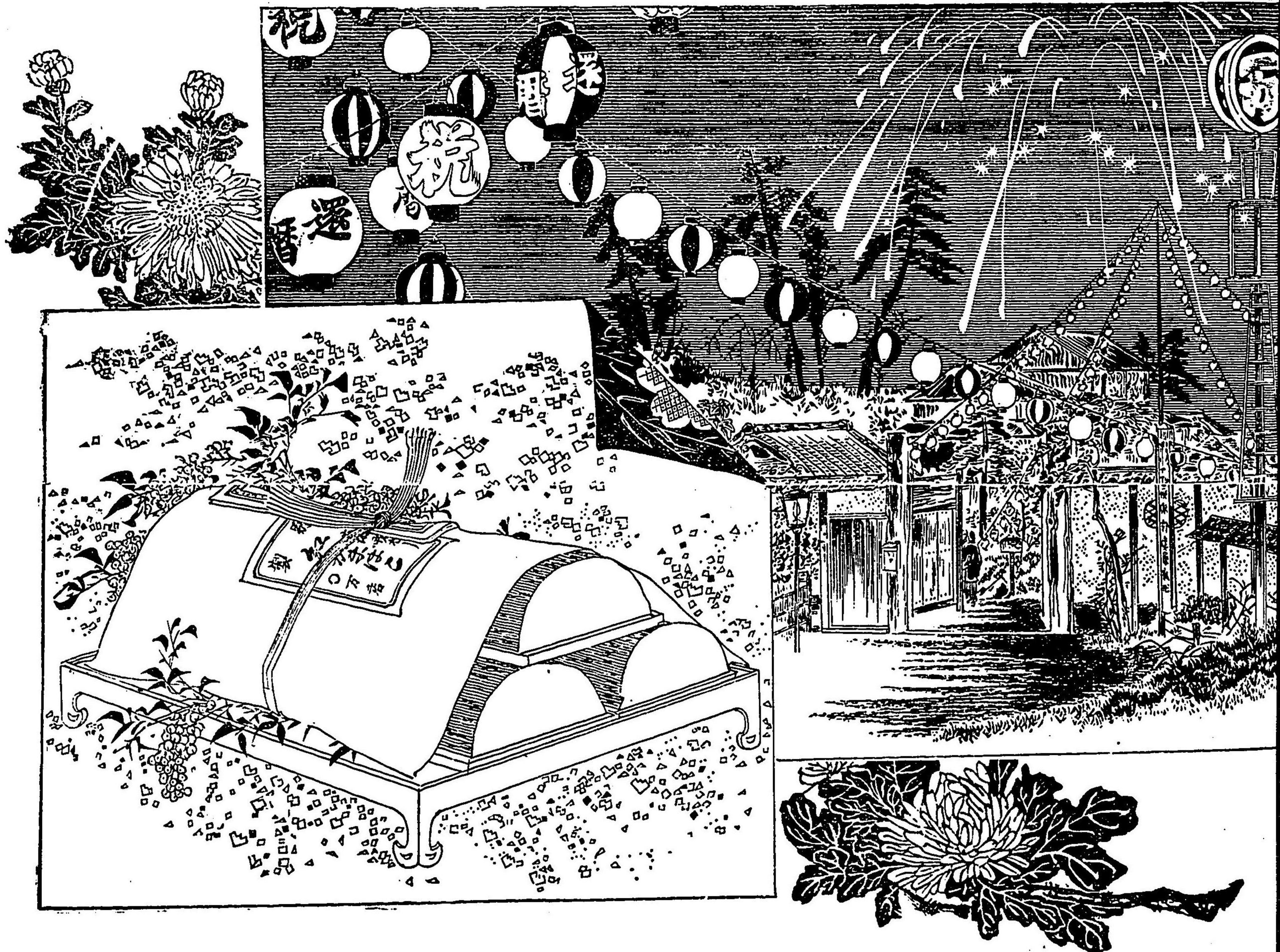


の殿命。そのまゝ立ちて奥へ行かると、我等一旦部屋に歸りて、ふよそ一時間掛りて、代るゝ養生より取替して貰ひしが、採用なきに今は是非なく、着のみ着のまゝ庭に下れば、秘藏子の阿真嬢、他の者の眼を忍びて、我等が袖の中へ小やかな紙包みを投込みぬ。

阿真嬢年の纒か十五なれど、平生伶俐な質とて、我等が放逐せらるゝを不便がり、何かの用にぞ、脂粉の餘財を恵まれしか。我等かねて上京したしどの願ひあれば、今が時機なり、これを旅費にしてと、袂探りて件の紙包み取出し、開いて見れば、先生の實弟にて當時東京組合の代言人高安道之といふ方へ宛たる、先生よりの書翰なり。郵便函へ投せよとて出しありしを、取違へたるものなるべし。我等むつとして袂に捻入れ、つくぐ考ふれば、先生の片手落ちな計らひ、同罪の笠谷には少しの小言もいはせ、我等ばかりを放逐するとは、これは行々阿真嬢の婿にせん存意にて、上坐の我等が居ては妨げと、さもない罪を故らに重

うして、邪魔物掃ふ量見ならんと思へば、口惜しき、腹立たしき。師匠といへど、勘當受ければ恩も義理もなし、日の暮るゝを待つて忍込み、爲んすべありと、我ながら恐ろしく謀みたりしなり。

時を計りて勝手知りたる門をくぐり、裏手に回りて先生の居間へ近付き、標子いかに耳を寄すれば、誰に對ひとてか、先生の密々話し、「さゝ見込みのある男ぢや。見込みあればこそ放出したのぢや。後來望みあるは塾中で大石一人、なれど遊びたい年頃とて、塾長からも言はせ、また私からも意見したが、今の所効目がない。此所は一つ不便を堪へて耻辱かゝせ、食ふ事にまで困らせたら、氣に張りが出来て憤懣もしやうと、爲を思ふての計らひ。なに忽ち途方に暮れるであらう。いや、眼さへ覺めたなら、どんな艱難も凌いで行く氣象のある男、その心配は餘計の事ぢや。しかし差當つて今夜はさうするであらう」と、聲空りて言葉も途絶ぬ。あゝ知らざりし、斯くまで我等の爲を思召しての御勘當かぞ心付



いて見れば、勿体なさに熱い涙がはら／＼。早速書翰取出して敏と伸はし、大事に内懐に收めて、敏多たび土に額付き、門と出づるとすぐ朋友の宿に行きて少しの金を借り、その夜に川口より乗船して、東京に入るとその足で切手と求め、例の書翰と郵重に郵便函へ入れぬ、みれも大恩ある先生への一つの奉公と思へばなり。

(下)

東京で修行するなら此所に限ると、かねて望みを属したる法律學校の近傍に下宿して、さて入校の手續きなど聞合はせしが、囊中すでにかつ付いて、束修と納むれば、湯銭にまで事と欠く始末。何れ片仕事してと、岡より腹と括って居たれば、さのみ驚きも爲されど、世渡りは思ふて居しほど容易の事にわらず。「罷り違へば車引しても」と、平生口癖のやうにいふて居しが、磁石据ゑねば東西も分からぬ土地、「おい淺草

まで幾許」といはれた所で、何程といふて好いやら、何方向いて走って好いやら、一寸出るにも自分が車夫の厄介にある身が、みれは及びたへた事なり。かつ一兩三度も投書せし事のある新聞社へ行きて、編輯に従事したさよし頼めば、敏員なしといふ。それでは切々投書せなければ、少しにても報酬得たしといへば今は大家の名文でなければ着客承知せず。たい悲壯と陳暴を書列べた前方ある論文、折角なれど掲載の餘白を少しと撥付けられ、我等口惜しかりしが、金のない時は分別もさしものにて、返す言葉と思付かねば、すく／＼下宿屋に戻る途中、何か参考になるべしと、縁日の夜店を片端より閲して、「みれぢや／＼。」下宿屋の亭主に周旋たのみて、古高卓、破毛氈、角行灯、おの／＼一箇、并に簾三枚損料にて并入れ、角行灯に一御手書認め所」と名筆揮ふて、何の旅の耻ぢと悟顔されど、流石氣が咎めて、たゞふり暮れてから或る

質屋の軒下へ場所を取りしが、出せ買はうで、その夜廿二銭の儲けありたれば、下等の生活、これで學費と食料の目的も立ち、早速學校へ入門して、晝間は有理化しい法學書生、夜間は淺ましい筆耕を化けて、およそ半期も送りしが、それ専門で腦目も振らず首突込みてさへ、成りがたさは學業。非常の俊才でもないものが、傍ら食ふ事に屈托して、思ふやうになるべしや。今度の試験にも、やうくお情ばかりの及第。後入りりの奴にまで尻に敷かれて……嗚呼無念、二兎を追ふものは一兎も得ずとの名言は、飽くまで承知して居れた。

ある夜常の通り店を張りしが、雨模様にて人の出少なく、都の大路に諫鼓鳥の棲むほどの淋しさ。平生の半高も儲けざれど、早仕舞ひして歸らんとする所へ、願詠りの職人体の男來りて、「子が生まれましたく、この事國の親類友達へ知らしたければ、手紙三十

前後の考へもあく、「そら持つて行きとれ」と、衣物と脱ぎて帶ぐるみ投道りぬ。

さて裸休、學校へ出られぬせず、またあの後の生計も立たず、搦て加へて亭主より勘定敷きたいと迫る。二進も三進も動き取れず、腕組みして身と壁に靠せしが、何の考へも出ず。我等このとき内心から、文珠さまの智慧借りたかりき。

折節近付きし亭主の足音、我等ぎっくり胸に應へしが、「高安さまのお使ひがお目に掛りたいとて見えました」といふ。催促ではなかりしが、我等またぎっくり、先生の御舎弟からの使ひ、何事かは知らぬぞ、逢はずに返すも不本意なり、逢ふには相當の禮儀もあるもの。亭主に泣付き借衣せんかと思案半端へ、つか

くと入来るに、我等釘に掛けたる袴と手早く取卸し両手通して、襦の所と襟に當て、手と支ゆれば、「貴君の御住所を知るには開口しました。東京數十の法

八本書いて下され。」「承知しました。一筆で時の

明く通知書、はがきでも持ちますか。」「いや、そんな不景氣な。目出度い時の事あれば、書き賃なんぼでも拂ひましょ。生まれた子の年長かれと、あるだけ文句と長うして下され、掛目四匁が六匁でも厭ひませぬ」といふ。巻紙の用意一本よりなれば、五六本買ひ足さんと、その男に店番頼みて、一

二町隔たりし紙屋へ走り、いさせさと戻つて來りしが、我店のなほに場所取違へしかと、見回せば矢張り質屋の軒下なり。子が生まれたとは眞赤赤虚言、騙詐り取らん謀みなりしと後にて心付き、憎くやうと血眼になりて駈回つたれど、影もあし。我等ぐんにや

りして下宿屋に歸り、包むべくもあらねば、あの事亭主に話せば、持主開付けて以ての外の腹立ち。紛失等の節は金子にて返辨すべしと、證書のあるを小楯にして、それ返せ今返せとせつかれるに、我等憤として

律學校、小口より名簿を調べて、終にあの先の學校にて御姓名と見付け、それよりお宿を聞いて参りました。兎もかくもお眼に掛りたければ、御同行申して歸れと主人の申し付け。さアお供いたしましたやうといふに、「何れ御用あつての事なるべければ、御一所に上りたければ、御覽の通り着るものとてござりませぬば……」それはお氣の毒。併し折角尋ねわたつて

お供をせぬも残念。斯うなさりませ、裸休のまゝで袴とつけて、上へはふれとお召しなさるが好からう」と、羽織肌いで與へらるゝに、我等赤面しながら、言はるゝまゝにして、胸かき合はせつゝ、随ひ行きぬ。「君が大石君か。その風俗では困難の様子ぢやに、何故我家へ来るのは厭ぢや」と、高安先生落人など

て、むけくに言はるゝに、合点の行かぬ事もあり、一部終始聞いて見れば、先に阿貞嬢より手袂へ入れられしは、余より大事さ、否な金にも換へられぬ手紙、

その大石に不便かけて、成業させて呉れとの文言にて、全く我等に與へられし紹介書。それとは知らず、捨てやうとした我等の手の手が、能うまア癩れざりし。その後横間先生ならびに阿貞嬢より、朋友に金かりて上京せしに相違なければ、引取りて世話頼むと度度の依頼状。それゆゑ手と盡くして心當り探されし趣き、逐一分かりたれば、その有難さ、忝さ。我等大坂の方に向ひて手を合はして……何れいふ事ならざりしなり。

それより下宿屋の埒明けて、高安先生方へ居候。我等も今は自分一己が立身と希ふばかりでなく、阿貞先生阿貞嬢に對しても、碌々として日を送りては、申譯立たずと、三年といふもの無中になりての出精。その間、輕症の病氣煩ひし事もあれど、事あらずは死ぬが増しと、打一通しつて、病氣にも勝ち、怠惰心にも勝ち、終に代官試験にも合格して、業務の際に、法律

學校三個所の講師と囑托せられ、身は繁務に取紛れ居しが、當度の避暑休みと幸ひ、高安先生の來らるゝに隨ひ歸阪して、久々横間先生に拜謁せしに、從前の不仕だらと咎められせ、高安先生自ら中に立たれて、今日よの俱樂部を借受け、不肖大石鈍太郎、横間と改性の披露する事となりしあり。我等がしぶくながら人間一匹となりしは、阿貞先生は申すに及ばず、荆妻阿貞、すなはち師家令嬢の賜物あり。この後は件の畑魔堂と我等生涯の誠めにして、小心翼翼、何日までも師家の聲價を落とさず、玉手水の流れ鏡長に清からん事と心掛くれど、才氣にして満足らず、切に死席各位の御指教を乞ふ

(そはり)

### 指二本

北野生

(一)

如春病院と筆太に記したる看板懸けし門の裡に、外來患者の履物へ合印を着けて、玄關前の土間狭き中で措勝べ、薬局の醫生は處方箋の順と追ふて、汚と氏の秤量と放そ間なら繁忙さも、今や幾く診察と乞ふ患者去りて薬取りさへ來きなりければ、常直醫は病室の回診に赴き、他の醫員は夫々に我が受持る病室とば見舞はんとて、腕車走らせ出往さぬれば、宛ら大風の吹き治まりし後の如く、今まで雷を喧しかりしだけに、一と入淑貸とせし心地せる午後の四時過ぎ、受附の書生はやとら机を片寄せて、玄關の中央に据ゑある大火鉢の傍へ中腰に膝み薬局の方を顧みて「殿田君ま

ア一則吸ぬかへもう急病人の外は來やせぬワ、と聲破けられ調劑の器械と片附け居たる殿田といふ兄習の藥劑生、藥劑の硝子戸と開放したるまゝ出來り「宮地君君は是れから樂に居るか僕は未だ當直の醫員が病室から戻ると在院患者の調劑をしなければならん」「さ少し話し玉へ君が聞たなら大失望といふ事件があるから」「また宜い加減の事と云て人を欺さうと思つても其手は啖んが」「イヤ欺すのぢやない實説さ然も君が頗る纏着しとぬる中窪の令嬢な、彼れが一週間前前に逃亡して行方が知れんとよ」「エツ中窪の令嬢が逃亡したと、君それを何人から聞いた」「先刻矢代の書生が薬取りに來ての話しき、親父から警察へ搜索願として目下専ら搜索中だつて」「矢代といふのは探偵ではないか」「左様探偵には違ひないが餘程上等の顔で搜索上の事は中々巧みに遣るといふ噂だ」「ソレでは嘘でもあるまいが如何して逃亡なんぞしたのだらう」「委しい情由は



知らんが日外院長が彼の令嬢と診察したとき斯ういふ性質の人は思ひ迫る事でもあると得手發狂と爲るものだと云はれた事があるから氣でも狂ったのではないかと思ふ「可哀さうになア、發狂の原因は何だらう」「酷く熱心に尋ねるぢやアないか僕も先刻チヨツと聞たばかりだから一々答辨は出来ないが何にしても君の失望思ひ遣るべし」「僕よりは君より頗る落膽だらうアツハ、と、と兩個の醫生が人の憂ひと樂しげに譯けもなき事語り合て笑ひ興する其の處へ當院の下男茂助といへる正直翁々が遙しく走せ來り「オ、殿田さんにみい宮地さんた、大變々々、と顔色蒼さめせい」と片息になりて云ふ藤子の尋常ならず見ゆるのみか大變の一語に度膽抜れし殿田と宮地は云合せし如く坐を起て式窓へ飛で下り「茂、大變て何だ何事が起つたのか、と異口同音に急しく問へば下男は裏手の方へ指さしつゝ「ウツウツ指二本……座芥溜に、とひまがらブ

探偵に巧みありとの噂さ高き矢代信藏は新參の探偵吏栗桐丈助を伴ひて如春病院に至り現場の摸標と篤くと調べたるうへ彼の二本の指尖を携へて我が詰所へ歸り來り徐に丈助と見返りて「栗桐君、君は如何いふ見込みだね、此の指の主は殺されたのか生きて居るか、又た女であらうか男であらうか、と問はれて栗桐丈助は毫も躊躇ふ様子なく「死だか生きて居るかの鑑定は附かないが無論婦女の指さ、爾して人に研落されたといふ事に就ては疑ふ所はないやうだ、と甚と無造作に答ふれば信藏は頭をうち掉り一生死の點に於ては僕にも鑑定は附かんけれど此れは男子の指に相違ない其うへ事に依つたら自分研たのかも知れぬと思ふ、と聞いて丈助は突外ある容色しつ「それは如何いふ譯けで「如何いふ譯つて別にむづかしい仔細はないが此れは左りの薬指と小指だから職業の爲め器械が何かに觸れて切斷たのかも知れぬ尤も此れは想像だから錯誤らん

くと身探ひせり、兩個は茂助が指さす方と凝視れども別に變りし摸標もなければ宮地は少し急込で「茂助如何したんだ狐にでも噛まれやせんか、といふ語を亞で殿田も此方を振向きながら「何だ冠り振て居るな左襟をきければ疾く仔細と話すが可い、と右左より問詰められ茂助漸く心と鎮め、さて斯々と告ぐる次第は曩に來院の患者皆既でに去りて履物預る用もなければ四邊の塵と掃き集り開をうち棄んとて裏の方へ至りしに二頭の犬が塵溜の中に這入りて塵邊に塵芥を取散し頼りに戯れ狂ひ居るにぞ大をば叱斥けて散亂せる塵を掃きんとしてフト見れば正しく人間の指尖二本が其の中に交りあるより餘りの意外にうち隣り藤子塵取り其處へ棄指さ斯く遠しく走り來れり何ばう氣味惡き事に候はずや、と云はれて兩個は顔見合せ愕然として言葉みさかりし

とも云へぬけれど左の指といふ事は確だ、シテ見れば婦女の左の指が這様に硬い筈はない「矢代君失敬ながらそれは君の鑑定違ひだと思ふよ僕は右の中指と食指といふ見込と附けた皮の硬いのは糸然りか烟草捲を職業にして居る婦女に違ひない其證據は理の皮の硬い割には表の皮が柔かいぢやないか「イ、ヤ君は未だ素人だから左様思ふけれど第一婦女の指にしては太過ぎるさと稍々輕蔑したる如き矢代の語氣に栗桐は少しく憤然として「實に君の云はれる通り僕は新參に違ひないが探偵上の事に就ては聊か研究せんでもない君が太過ぎるといふのは小指と薬指だと信じ玉ふからの事さ食指と中指だと思へば太いと決して云へないそれに今一つ婦女の指といふ事に就て動かさない證據を發見たソレ能く見玉へ此の爪の間に自然と紅が染込で居るのど筋の中に白い粉が残つてあるのは此の指で紅や白粉を塗た験だふれでも君、婦女の右の中指と食指

といふのは錯りかね、と丈助が熱心なる辯據立てに矢代の鑑定は根據乏しく如何やら危うげに聞ゆるものから信藏は是れまで見込みと附けたる事に錯誤ありしは勤なきより自ら信せる心の厚ければ丈助が口實しく彼此れ云ふを而憎く思ひ議論は兎も角も我が老練に及ぶものかと云はぬばかりの容体にて「栗栖君、君の鑑定も一理正しいではあるが餘り深く考へ過ぎると却て事實を誤るものさ君は紅だといふけれども此の赤いのは血が染みて居るので白い粉が筋の中にあるのは此の男の家業が粉商か何かに違ひない、と最ぞ冷かに云放ちて栗栖の顔をうち凝視れば丈助は其様な薄赤を辨駁では我が提出したる證據とばうち徹るに足るものかと耻の裡にて冷笑ひ再び口を開かぬにぞ信藏はくもソレと曉りて心憎さのいや信ければ栗栖の助けを借らせ我れ獨りて探偵と遂げんと思へばわざと反さぬ顔して丈助にうち對ひ「今この所では是れと信とよく見込みと異にして

居るから共に従事した所が迷ひの助けともなるまいと思ふゆゑイツリ別々になつて各自の技量だけ十分遣つて見やうではいか、と聞いて栗栖丈助も固より望む所あれば一職に及ばず承引けり、矢代は更に語を纏ぎて序でに中窟の娘の所在が知れたら報知して遣り玉へ「宜しい承知した、是れにて矢代信藏と栗栖丈助は已がじ、指す方へと袂を分ちぬ

(三)

矢代信藏は彼の指二本の主をば男なりと深く信する所あれば新恭の同僚ある栗栖丈助が婦女ぞと抗論しを心憎く思ひ一日も速く我が見込通りの事實と探り出し老練の技量と示して丈助が高慢の鼻を挫ぎ以後我が言葉に従はしめんと思へば遂も油断なく其が巴鼻と得んものど百方に工夫と運らす旁ら白き粉を扱ふ家には一軒毎に目と配りて思りに注意を加へ居りしが今しも但ある街を通るに石灰と商ふ家のありしかば信藏例の如く

目と配りて家内の様子と窺ひけるに雇人にやあらん木綿布子にアツシ被りし一箇の男の門口に積累ある石灰の苞をば家の裡へ取入れ居りしが其の男の左りの小指と薬指とを白き布もて包みあり苞扱ふにも屈伸自由ならぬ体なれば信藏太く悦べる餘りに我れを忘れて「是れなりく、と叫びければ彼の男うち駭きて急に後方を振向き信藏の顔を凝視けるにぞ矢代はハツと心附き左あらぬ体にて件の男を喚近づけ「余はセメントと購ひたしと思ふがかん身の家に好き品ありや、と問ひければ男は手を掛けし石灰の苞と下に措き「私方は御覽の通り石灰のみと商ひまするが仲間の中には好きセメントと賣るものありますから御望ならば御周旋致しても可い、と聞いて得たりと心に喜び「それは好き都合あり何卒周旋と頼みたし尤も至急に入用の事なれば迷惑ながら是れより其の家へ同道致し呉れまじさや、と云れて此方も商買づく幾許かの口鏡になる譯けな

れば一職に及ばず承知して「最と好き事なれば直ぐさま御供致しませう此れにて一服召上り好く御待下されたし、と店の裡に請じ置きて奥の方へ赴きしが主人にや告げたりけん被りしアツシと木綿布織に眼替り問もなく其所へ出来り「イヤ御同道致さん、と先に立て家を出でたり、信藏は如何がなして彼の男が指に傷を負ひたる仔細と聞紀さんとするより外の念なければ百方に言葉と設けて問ひ被りければ男も亦た談話の中に指と薬指とを白き布もて包みあり苞扱ふにも屈伸自由ならぬ体なれば信藏太く悦べる餘りに我れを忘れて「是れなりく、と叫びければ彼の男うち駭きて急に後方を振向き信藏の顔を凝視けるにぞ矢代はハツと心附き左あらぬ体にて件の男を喚近づけ「余はセメントと購ひたしと思ふがかん身の家に好き品ありや、と問ひければ男は手を掛けし石灰の苞と下に措き「私方は御覽の通り石灰のみと商ひまするが仲間の中には好きセメントと賣るものありますから御望ならば御周旋致しても可い、と聞いて得たりと心に喜び「それは好き都合あり何卒周旋と頼みたし尤も至急に入用の事なれば迷惑ながら是れより其の家へ同道致し呉れまじさや、と云れて此方も商買づく幾許かの口鏡になる譯けな

「此の傷の爲に、と答へしがはつと思ひし容子にて其  
 が儘口を黙みたり、信藏透さず「何、傷の爲と申シテ  
 それは如何した傷にや、と重ねかけて問ひければ男は  
 困せし容色にて「此の傷を負けたる情由は決して他言  
 致されません、と云切りて其後は如何に賺せと騙せと  
 も他言せぬとの一語の外は更に答へとさざれば退が  
 の信藏持餘し聊掌の權にて問落さんかと思ひしが 倘  
 し人錯ひにてあるときは此噂さを疾くも加害者などの  
 聞知りて跡と跡を誣滅する等の事ありては益  
 々探偵上に困難と来すべしと思ひ返して顔と和げ「イ  
 ヤ他言せぬと云はれるのを無理に聞うとしたのは眞に  
 失禮であつた然し余は妙な性分でフト聞掛けた事は根  
 から葉まで聞て仕舞ぬと氣が濟んので時々人に腹と立  
 れる、それは爾うとかん身の指尖は切落されて失ので  
 せうか、と又もや指の事と云出され彼の男は臆然とし  
 て「イ、エあります其様な不具者ではありませぬ傷さ

へ癒れば満足に五本揃ひます嘘と思召すから御覽に入  
 れませう、と腹立ち紛れに巻きたる布をクル／＼と解  
 きて信藏の鼻の前へ差出せば石炭酸の臭アンとして五  
 本の内に欠けたる指なし

(四)

爰に又栗栖丈助は思慮深き男の多彼の指の摸稜と熟々  
 と考へて這は貧家の女にして常に紅粉と施すものと思  
 はれぬ此の判断に錯りかくば白晝の間は手職業と申し  
 居り夜に入りて後ら眞淫をぞ移ぐ女なるべし、左すれ  
 ば晝間は女工多く雇る製造所を探り夜は眞淫婦の集ふ  
 べき穢路陋巷を索ね歩行ば巴里と得る事なから半やは  
 と斯く探偵の方針と定めて朝は未明に家と出で夜は更  
 關けて臥房に入り三度の食と忘るゝまで偵索とまゝ  
 怠りなければこそぞと思ふ端緒と探り得ず徒らに一  
 と月あまりと過せしが一夜眞淫婦の巢窟と呼ばれたる  
 其陋巷を過りけるに蔭暗き機下へ三四個の私窩子佇立

て何事かを語ひ居りしが中ある一個が少し高めて  
 「眞個に無慙ぢやないか吾儕の様に私窩子だの白鬼だ  
 のと云はれる者でも彼様を眞似は出来ないのに如何に  
 情夫が大事だと云たつてお嬢さんとも云はれる身で…  
 …と云ふ折から栗栖の来りし聲音に心附きて左右に別  
 れぬ、丈助は今の話頭の耳に留り前後の事は分らぬを  
 る何となく様子ありげに思はれければ、ツト女の方へ  
 進みて「オイ、余と遊ばせて呉れないかと、いひつ  
 其袖を奪るに女は丈助の容貌や風体と左視右顧て捉  
 られし袖と振拂ひ「旦那お侮弄なすつては行ません主  
 公方のお遊びなさる所ぢやありませんよ、といひ棄て  
 と往んとするにぞ丈助遮しく呼留め「左様事情なく云  
 はんと遊ばせて呉れ實は今夜チト仔細があつて寐る所  
 のないに困つて居るのだから、と頼むやうに云ひけれ  
 は女は漸く承知して「それでは寐る所を借りて上げま  
 せう主公は如何化けやうと思ひますつても吾儕の眼で  
 一目睨たら誠多に違ひはありませぬ、といふは如何や

ら此方の身の上と曉た様な口振りなれば此の調子では  
 何と聞いても明々には話すまい困つたものと尋念のう  
 ちに疾くも怪しの家に伴なはれぬ、丈助途すがらに一  
 計と案じ出し一圓紙幣一枚を女に遞與して「余は酒と  
 飲ぬと寐附れぬ癖があるから此れで酒二升と何ぞ殺核  
 と見刷つて来て呉る過利は使賃に遣からと聞いて女は  
 稍々安心せし様子なりしが頗る酒液も来りければ暫く  
 酒宴に時と移せり、丈助は胸に一物あるゆゑに數々女  
 に盃と侷めけるが初の程こそ虚辭退して居たれ根が眞  
 みなき眼婦なれば下地は好きさき御意はよし何時し  
 か盃の數重りて早や酒眼濃臙として膝崩れ呂律も既に  
 紊れけるにぞ時分は好しと丈助は何氣なき体にて女に  
 對ひ「先刻お前們が、情夫の爲にお嬢さんとも云はれ  
 る身を無慙い事をしたとか云つて居たのは何だか大層  
 面白さうな話したが一体如何した情由かね、と問はれ  
 て女は遙に崩れし容と正して「ホラ来た何でもソレに  
 違ひない、と低聲にて語くと丈助聞いてうち笑ひ「お

前は野に余と怖がるが余は別に悪念のあるものではないから心掛さなく話すが可い、と尙も酒と肴めて十分に酔はせし上復び件の談話を持出し如何した情由としはく、聞へば女も今は心安堵てか但しは福に本心と失ひてか其の情由は云々ありと語るを聞くに或る熾寸製造所の持主中衛藤七と云へる人の娘にお玉と呼ぶがありて父が製造所の職人元吉といふものと人知れず契りと密り未は夫婦と約束したるに此の元吉にはお玉より前に深く言交せし内縁の女あり、其の女も實は元吉と共に中津の熾寸製造所へ通ひ夜は密に淫と露りて元吉に小遣ひ贈ると身の樂しみとなし居る由にお玉何れよりか聞出して妬ましく思ひ其の女活け置いては我が望み違ひ難しと朝に恐ろしき心と懐ける折りも折り或る夜元吉が其の女と伴ひて芝居と見物に性きたりと聞かば玉はクツツと取逆上をが際途に待伏して竟に女と殺害したるが此邊で賣淫婦の親分と呼ばる、闇魔の熊藏といふ男が其處を通り合せ手疾く女の死骸を取隠し

玉と己が家に誘ひ往きて賣淫婦の仲間に入れんと頼むれどもお玉のこれに應ぜざるにぞ今に熊藏方の二階に閉籠めありと一部始終と告げれば丈助は我が鑑定の過半ならせ申れると肛の裡にて誇りつゝ「シテ其の死骸の手の指は満足に揃つて居たかな」「はい、エ右の中指と食指とがありませんでしたね」

其の翌日票柄丈助はお玉と熊藏を捕へて意氣揚々と警署の門前に來れる折柄矢代信藏が彼の石炭商の雇人と伴ひて來るに遇へり、お玉は彼の男を見るより我れと忘れ「オ、吾夫、元吉さん、と叫べり、男はお玉に牽の被れると見て不便さといふ容子なりしが思ひ切たる体にて「お玉さんか、私はお前と障へやうとして指に負けた此の疵の爲にお前の罪を申立ねばならぬ、と言脱つて首を垂れぬ」

(元)

お玉が賣淫婦を殺害したる場所は如春病院の裏手に接せし所ありといひ下男の茂助が塵芥の中より發見せし指は犬の咬へて來りしならんといへり

冷熱一紙

苔ごるも稿

(上)

木理は雨に瘖て「高木剛藏」の墨色刺し標札打たるこい曾根崎村の山岡近き一構は、人出入の繁さにあらず暮し向派手あるにもあらず、下女下男の働く様を見たる者なく、物賣る商人の此門潜りたるも亦稀にして、枳敷の垣根の穴より這出る狗兒までが細々しく力なけれど、人の懐中敷へたがる隣保の村雀が朝な夕な井戸端にての囁り聞けば、高木の家有福ありとの囁喧すし、去ど富たる裡に悲み多きが世の形勢とやら、奥の方なる六疊の一間にいつの頃か病臥す主人の剛藏は肉落ち骨露はれ、身の油を盡て横立洋燈の明りも頼て影薄き風情なり、枕元には水薬の瓶、袋、コップ、猪口

なぞ載せたる圓盆置き、其傍に坐りしは二十五六歳の新蝶番、髪綱れ看病被れに面も凝れたる腕伸て煙草吸ひながら首傾け居たりしが、何思ひ出けん最と親ら眼にて病人の顔ジツと凝視め「オヤ何時まで寝るんだらう子、胸くその悪い香ん坊、此の老老がお金を大切がる心と私の憎がるのと秤に掛て試したい程だよ、だけれどお醫者の原さんは最う永い事はあいと仰有つたし、幾ら何だつて冥土へ有企獲らず香負て行かれもしまいから、暫くの間だもの辛抱が出来るとも、併し考へて見れば夫だけ位の事が無つちや埋らない話だよ、誰が酔狂らしく五年六年斯を嫌らしい爺の自由にあつた爲め、アレだけ堅い約束した川島さんと可愛さうに、出雲の社へ立番に遣て何は紐かの夫婦が曠がましく島居と通るのと、アノ人に美ませたやうな酷い事とするものか、ア、思ひ出せば川島さんに氣の毒でクサくして來るよ、オ、左うだつち此奇めが餘り業ばつ

て親類にも愛相つかされたのが氣の毒だと云てお知己の利兵衛さんが近々遺言書を書せる積りだと聞たが何か私の思わく……』と獨言するうち寐入たる剛藏ゴボソソ〜『チヨツ起て居るやうだ』と四邊見まはし復た剛藏と打守つて『ウム依然寝て居るナ、ダガ最う薬の時間だ』といひつゝ枕邊に進みて搖起す。剛藏はビツタリ飛上りてゴホン〜と暖入り『オ、お辰か、己は大層悪くさつたゴホン〜ア、苦い』アレ旦那、そんなお氣の弱いものと仰有つちや私も心細くなりますよ、わんなに宜くお眠りなさると、後がズツと楽にさるものですからお鬱なさいますナ』ウムそんな長く寝たつたか、己は十分ばかりだと思ふよ』それア旦那眠る時間は早く経易いものでせもの、私はお傍に附て居ましたからお快くお寝みになつたのよよく存じて居ます、夫はさうと旦那お薬と上つてもよい時分でもないですよ、サア丸薬の方からお服なさいまし』ナニ又薬か

、いつまで服だつて際限が有やしないワ』ハイ左うですけれども、旦那は原先生が三十分毎に上り私に言置たのと御存じでせう』左うサ、知て居るから六七十日の間は一分も違へずに、夜も寝る程薬服だが、些ども効驗がないばかりか弱つて〜實にこの通り弱り抜いたのだ、お辰お前は己が何か喰たからうと思はさいか』エ召上り物……、夫はお察し申しますか物を食ればお命に關はると先生が堅くお吩咐なさいましたもの』ナニ澤山は食へないから半熱の鶏卵を宜い、よ、よ』と拜むやうに手と動かせど『イ、お能ません』と抑へる』ぢやア牛酪一杯でもよいワ、外に何にも欲くない、コレ此通りだ』と舌鼓しきながらゴホン〜『デモ旦那、若し上つたら直ぐお死なさいますよ』イヤ〜食て死ぬか何れ食なかつたら却て死ぬだらうと己は思ふ、ダカラお辰、粥湯と少し飲たい、己の大好物だ』粥湯……エ滅相もさい事、大毒に存りますよ、夫

よりかお薬の方がようムいます』オヤまたか』とゴツ〜『併し御病氣のお薬ですもの』と丸薬の袋明て小粒と剛藏の口に入れゴツツに温湯を注ぐ』ア、苦い、よの前に呑だのがまだ喉にあるゴホン〜、實に否だナ〜呑でも口から戻りさうだ』其代り後で清々いたします、サア最う一遍でぞ』剛藏はまた暖上げ』己の咳は性が悪いゴホン〜』と残りの丸薬を嚥下し』ア、頭がグラ〜して又倒れさうだ』オント旦那顔にあつては能ません、まだ水薬がムいませ服ばお心よくなりませから』ナニ水薬だト、己の襟腹には水薬三十瓶と丸薬が三箱も入つて居るやうだぞ』おア〜にそんな物は是と上ると直に下て胸が透ますよ』剛藏は猪口と取り一口飲で悲しさに猪口の中を眺める。お辰は急たて〜『サア早くお上りなさいまし』と言ふ剛藏は答へなく手拭にて口を掩ひつゝ勢れを察えてや仰向に臥し目を瞑たり』エ、自然たい、最う九時過だのにナセ

先生の御廻診が遅いだらう、餘程熱が出て来たやうだ』メ左つ右つ。剛藏は足と纏めてウン〜と呻る』何うかなぞつたノ』己は大變に切ない、ウン〜足を撫つて呉れ』こ〜でムいますか』イヤそよでない己の臂を揉め』『へ〜コレサお辰下だナ、己の胸だ胃だオ〜』』些とは落付ましたか』イヤだめだ、速も助るまい、ア、南無阿彌陀〜考へて見ると己は恐ろしい悪人であつたナ、ア、〜』ナニ旦那何でそんな事がムいませう、旦那の姪兒や甥子の外日本中の人は皆善人だと申して居ます』左うかも知らんが、己は善人でなかつたから眞實に後世が怕しい、ウム〜』何の旦那、縦令世間に旦那と悪くいふ人があつたとして月の立られぬ口ですものお氣に留るには及びません、ですから御心配をなさらずに一日も早く御本復なさるやう……』ウム忝けない、お前の親切は死でも忘れはしな

「『アレ日那そんを事仰有つても嬉しくは存じません、私は悲しくなります』とハンケチと眼に當れば『お辰泣なく、最う何れ言はさい』と俯伏して吐息を漏らす。

「オヤ先生がお出になつた、サア何うぞ」と案内につれて原と入る醫師は疑捻りながら病間に通り、病人の容体に目を注ぎ耳に口寄せて『如何です』剛藏は言葉なく唯頭と掉る『フム能ませんか』ハイ『ドレ〜お脈と拜見』と帯の間より金時計出し暫くしてお辰の方に對ひ『脈搏百三十五度、ふれア非常だ私の申した通りになさいましたらうネ』ハイ取うチャント『フム夫で斯でムいますか、何か隠さきに言て下さい、何ぞ粘りのある様なものを上りばしませんでしたか』イ、エ欲がりましたけれど、先生のお命令通り唯薬ばかりと服せました『フム困る〜大層悪い、速も世界中に此命と繋ぎ留る薬はありませぬ、ダガ薬は服むため

の物であるからモット吞せなくては能ません』と剛藏の傍に寄り『御主人私に及ぶだけの力と盡しましたけれど必貴君は大變に激くなりました、併し御主人は黄泉の障りと避る爲め、浮世の關係と奇麗に落着て行たいと思ひまするならば忠實なお妾や懇篤な醫者其ほかの人達へ情と恵みを懸て御遺言書とお作りなされるのが尤も得策であらうと私は考へます、兎に角貴君は充分に薬を服つた筈でムいます』病人は夢中にあつて『オ〜〜苦しい〜』お辰は涙に咽んで言葉おし。原は剛藏の肩を掴み『成ほどひどい〜、私の経験に依るに斯うあつた人間は死ぬに定つたもので、明日ごろは多分……、併し私の方剛が惡かつた爲ではない、ドソ宅へ飯つて直にドン〜薬を持してよこさなければならん、フン病人の壽命は短いが藥料の勘定書は頗長くなるだらう。

(中)

心も空も花盛り、芽生む柳の翠の髪と英吉利とやらんに結び束ねし、床しの色香は挿と花替の椿に籠りて、飛交ふ蝶に春の情亂れ易く、群行く雁に秋の隠えばしは隠し。愛またるゝ頬の涙、よる芳紀は今十八の品盛りに、粧飾は本場の女學生。ふゝ高木家の裏庭なる枝折戸の傍らに身と寄せて氣遣はしげに四邊を回顧り『アノ健二さんは妾の伯父さんの六かしくなつたのと御承知になり、夫に就て是非話したい事があるから、當家へ来て待て居れといふ御手紙を今朝下さつたが、ナゼ御出が無いのだらう、お辰さんに見つからないやうに早く逢たいものだ』と眉の間に皺よせて待遠しうに耳側でつ、下着と上着の袂の間より細く温みたる書翰取出し展つ眺めつ怨めしうに、又ニツと笑ひて内懐より毛糸の襪衣に、シツカと押當て『我情人〜』と右の手にて胸の背輪と撫る折しも同じく忍び足に近づくと吉澤健二、軽く娘の背中打ち聲を察めて『

オ、梅子さん、僕が今朝早く原先生の處へ往たら、伯父さんの病が更まり臨終にも間がさいだらうと話したのは、例の通り原先生が緩らかお負つたのだらうと思儀したけれど、若しやとも思つたから貴女へ手紙上げて僕も急いでやつて来た譯ですが、其實僕の胸の裡にはそんなじよ其邊の人の顔と見たいといふ分子が……ねエ梅子さん』フン何うですか存じませんリ』ナニ知らさい……、ヘン其方は知らなくても此方はチャーント、梅子さんの心が何時までも變らないで僕を相棄る事のないのど知て居るし、ね、伯父さんの死だ後は誰かも甥と同じやうに幾百千の財産所有者と成り澄して多くのワイ〜共に、諂ひ侍かれる事も僕にチャーンと知つて居るから、斯な寒貧は餘程氣と附て居ないと匂呑あものサ』エ……、ハイ妾は何うせそんな浮薄者でせ、サ、幾らでも輕蔑ささい、僅な金か情好を棄去るものと思ひまするなら、ア、口惜しい〜』

、非常な逆鱗で恐入つた、此奴ア大失策、梅子さん全くは僕の嫉妬から痛くもない貴女の腹と探つて見たのサ、コレ梅子さんの通りだ赦して呉れたまへ、何も謝るには及びませんけれど、郎君は餘りだワ、ア、悪かつた、寶嫉妬の外は一点の邪心もないのだが、併しいまに種々な奴等が貴女の身と財産に對して、何だかだど指し、酢だどか毒草だどか騒廻るのを目前に見ても、退いて僕の身分と若れば所謂鰥魚の魚混りで、假令口出したつて誰も相手になつて呉れないと思へば、寝念で、堪らないよ、何の、夫は郎君の相愛です、妾は素より郎君の身分と愛したのではありませぬ、唯郎君を慕ふのですから將來の徳心配無い筈でありませぬか、また郎君だつて妾の精神と愛したのでせう、勿論サ、ですから妾の所有物の増減のため郎君の愛に謙遜の出来る譯は決してないと思ひます、左うとも、」だけれど伯父さんは妾を可愛がらぬの

でよいから、財産の分配方が皆と差違ふるとはありませぬ、さうなれば妾の物は郎君の物ですもの厭棄るの何のといふ事が出来得ないでせう、オヤ、お辰さんの聲が聞えるやうだワ、アノ人に認かると面倒になるから健二さん彼方へ往つて、欲しいワ、」ぢやアお前のいふ通り私や向ふへ行やせう、アヲ菊五郎の假寐よくつてよ……」

病間を見れば齋藤利兵衛といふが、病人の枕元に美濃紙展て何か書終り耳に筆挟みて身と剛藏の方に倚せ、高木さん貴君の仰有る通り細かに認めて、署名も捺印も済ましたが、若しお改しなされる箇所が有と能ませぬから、最う一度讀みませうか、イヤ誠に有難う、最う二遍もお讀聞けにありましたから別に直す處もありません、オ、大層悪くなつて来た、私はこゝに獨り居た方が氣兼ねなくてよいから何ぞか介意下さるナ」といふも苦しうなり、」夫では私は歸ります、お大事

にさびいまし」と立上るトタンに入來るお辰は枕邊に坐り、ハンケチにて目と拭ひながら「旦那、形見別の事で旦那はナゼそんなにお苦みなさいませか、心配でなりません、オ、泣き、お前の事は忘れて居ない、」だつて泣きに居られませうか、夫は左うと、アノ旦那梅子さんが来て旦那に逢たいと申して居ますよ、」アノ梅か、早く呼んで呉れ、已は死ぬから誰にでも別れが告たい、オ、」お辰は秋斷つ、聲を殺して「お嬢さま、サア早くお出なさい、」梅子は伯父の便り少さ様を見て「伯父さん妾が是まで度々お見舞に参りましたのに、ナゼ逢て下さいませんでした」と怨みを含めて問へば「ナニ逢かかつた……些ともお前の來たのと知らなかつた、己はお前と不人情な奴と思つて居た位だ、エ……、逢ひます、」デモお辰さんは伯父さんが妾に逢たがらないと云て例時でも、上り口から返しました、イ、エ本當でそ妾ばかりでなく従兄の宇之さんや義信さんも始終充足

したのが何よりの證據です、伯父さん何か御立腹なさらない様に願ひます」と言葉に眞籠らして詫けり、剛藏は左も苦しげなる聲も息も杜絶れ、」フ……、お辰が、何故己に知らせなかつたのだお辰……、お辰は梅子と睨む眼の光凄く、怒れる聲鋭く放つて「フン呆れたもんだ、虚ついて人の良い伯父さんを欺さうとしても書餅ですよ、人影どころか魂だつて來やしない事は旦那がよく御存じです、フン梅子さんは伯父さんの外に澤山、案じなくてはならぬ人があるでせうサ、お嫁しなされるナ、」何ですトお辰さん「何ですか貴女の胸に聞いて御覽、フン面白くもない私と旦那の中と悪くさせて、跡を掃煙さうと思つたつて最う先刻利兵衛さんが来て、遺言書がチャーンと出來て居ますよ、」剛藏は懶げに口開きて「オ、水呉れ、」アノ水……、オ、」梅子は膝行り「今上ます」と云つ、鐘子の水とコップに注げば「ドッコイ性根にはおせませぬ、」とお辰は梅子の袂を押する「解におし

お辰さん、是までの都合せに今日だけ妾に伯父さんの  
お世話させたつて別に罰も當りませぬまい』『イ、ヤ成り  
ませぬ』と互ひに罵り争ひて『早く水……水と病人の  
いふをば耳にも掛けず。遂に梅子は持たるコップと發  
矢とお辰に投付て『そら見る』『ナニ此の淫婦が、屹度  
返報するから忘れなざるナ』何うなりと御勝手サ、エ  
、腹が立つ』『フン立たらば横にお寝ささい』『エ、  
口惜い、幾ら川島とかいふ立派な後精があるか知らな  
いけれど、餘り阿呆におしでなさいよ、妾は疾から後精  
を見て何もかも知て居るワ』『フン幽有難かつたらうよ  
、お賽銭なしに何ばせも拜せして上ませうサ』『剛藏は  
聲も枯野の虫の音最と哀れげに』『オー早く、ア早く  
、ウム』『と手と膝くのみ。梅子は袖に顔掩ふてツ  
ト立上り』『ア、妾が居なくなつたら、誰も伯父さんを  
信切に介抱する人がないけれど、誰かの顔と見ると口  
惜いから取ら彼方へ行ますワ、大きにお邪魔さす』『と  
裏向もせず出て往く。後にお辰は切齒をさして』『エ、

胸が燃る腸が煮る、八裂にしてやつても腹が癒さぬ、  
さつと返報する、フン遺言書を讀だら鼻があくだらう  
、飢死させる事も出来る、ア、遺言……ダガ旦那  
は水と仰有つたが、私(コップ)を撲付た爲め水は些ど  
もなくあつた、ドラ臺所へ行て取て来やう、旦那く  
オヤ氣絶しなすつたやうだ、旦那く……南無阿彌陀  
佛く、オヤ旦那はいよく死だく、此方は望んで  
居た處だつたがフン定めし吃驚する人もあるだらう……  
、オヤ息引取つた死だく』『ワツと泣伏しつゝ有か  
無かの低き聲を漏して『川島さんとは愈よ首尾よく夫  
……、梅子の畜生には返……、併し早く初七日……遺  
言書く……』

(下)

罪障の山に無明の雲重り、生死の谷には煩惱の水深し  
。世は先づり追練の、他人と焼く隠坊もいつしか茶尾  
の煙と化するとかや。去ば富裕の聞え高木剛藏も命數  
既に盡て、今はたゞ佛檀の前の白骨と、点す線香の煙

どに量無き家れと留めぬ。お辰は佛前に對ひて殊勝げ  
に掌と合されど、心ある間に在らざれば見れども見え  
ぬ回向文、看經も祈願も徒らに表面ばかりの不淨勤行  
『ア、今朝は何うして時計の廻り様が遅いだらう、動  
悸がして堪らない、川島さんは先刻から臺所でコッソ  
リお酒飲つて居るが、早く利兵衛さんが来て呉れない  
とアノ人は酔潰れて仕舞ふだらう、何だか心配になつ  
てきた、川島さんは私と目的にして北野邊の地面を買  
ふなして居たつたが、オ、ドキノ胸騒がしてなら  
さい』と眩く後の襟明けて入来るは、待つ人あるかと  
轟く胸と押へれば案に相違の梅子なり。見るよりお辰  
は眺釣り上げ、愛相氣もさく七分三分に梅子の顔をジ  
ロリノと睨付け『オヤお嬢さま……、今に遺言書と  
讀上げたら誰が此家の女主にゐるか、何もかもチャン  
と解りませうサ』『ホ、お辰さん何とお言なさるノ唐  
突に……、妾の心はなかく、夫が氣樂なんでないワ、  
ホ、お辰さん自分の都合のよい様に、甘く伯父さん

と籠絡して仕舞ふまでには幽御心配な事でしたらうネ  
』と嘲る此時遠慮もなくツカノと入来る吉澤健二。  
キロロノと部屋の内見廻しお辰の傍に膝進ませて『  
お辰さん僕が今日突然参つたのは、全くこの危急存亡  
の場合に梅子さんを保護する爲です』と鋭く言ひ放て  
ば『フン口は重寶なものです、何もそんな分疏なさ  
らなくても貴君の腹は百も二百も私に讀めて居ませよ  
、フンノ』とお辰は鼻にて遇ふ。健二は少しムツ  
ト顔『ナニ……、僕は敢て汚らばしい金銭上の事なん  
かに毫顧介意しやしないよ』『フン可笑い、誰に限らず  
錢金の事と思つて居るからこそ、左ういふ体のいゝ言  
草が出るものですサ』『ヘン自分の心に引くらべて清  
淨な僕(餘滴が、飛だ二十四孝の十種香の段だ、濡衣  
着せるとは淺草了簡サ』『ハ、何とでも仰有い、夫  
ヤ左うかめ知れませんが私はたゞ長い間一ツの不都合  
もさく、下女兼帯の奉公した其御姿美と戴らさへそれ  
は宜いのですから……』梅子は傍にてもどかしがり』



健二さん最もう何も管々しく仰有るには及びませんワ、お止なさい〜『ウム話らさいから僕だつて言たくはないのサ』お辰の二人とつく〜『視て』ですがお嬢さん才子は輕薄とやらいひますから御用心なさらないと子……、フ、ン〜『エ何をすトお辰さん最う一度言て御覽、ア、腹が立つ、左うでせう健二さんアノ通り堅い約束した郎君と妾との中と、妬むのだから憎むのだから知りませんが、種々な事言て水差さうとしたつて……、馬鹿らしいワ、耳の汚れですからサア彼方へ行ませう、よ、よ』と健二を促して立出んとする折し、亡き人の甥に當る宇之助と義信とが原と云る醫者と話しながら歩む聲上り口に聞ゆ。お辰は低き聲にて『サア死骸の臭を嗅付て腹の黒、烏か何羽も〜やつて来た、ア、恐といふものは怖しいものだ、チ、ミス思々しいワ』と舌鼓するうち早や銘々に坐と拵へたり。原は何の疑檢繰り落付拂つて『お辰さん貴君は還言書之事と御存じでいますか』イ、エ後で彼是言はれる

のが辛くて私は其場に居ませんでしたから、サツパリ存じません『フム〜左様か』ハイ些ども……、オヤ利兵衛さんの咳拂ひが聞えるやうだ、オ、本にお出になつた〜、サア何うぞ此上〜』利兵衛はお辰の敷たる柵に坐りて『オ、皆様お揃ひですネ、實は切て四十九日の中陰過てからと存じて居りました處、何か皆さまの内輪に云々が出来ましたとやら私に知らせた者がムいまして、左ういふ事が若し有ましてはお互ひの本意でもありませんし第一佛に對して澄ない譯と思ひましたから、今日は初七日に存じますのを幸ひ、まだ寺へ納めない白骨の前へ皆さまと申して還言書を披き、チヤンと夫々聲を明まして皆様のお腹の蟠りを解き、申し悪い事ではムいすすけれど、悲みの中の打解顔といたしました上、一同揃つてお寺まで亡き佛のお供いたと様にと、及ばすながら私が取附らひましたのでムいすす』と挨拶し終つて提籠入と腰より抜きスツバ〜、喫す傍へ、お辰は摺り寄て歎歎く。利兵衛は懐中

より紫色の帛紗包取出して膝の上に置き、また袂探つて眼鏡出し掛たる上よりお辰とギョロと覗み』お辰に「なさい〜」と叱るやうに囁められてお辰は忽ち顔打ちかみ端然と膝に手を載せたり。利兵衛は頼て仔細らしく帛紗包開き、美濃紙の一通と手に取上げ咳一ツして濁聲高く讀はじめぬ。

一我らは最期の際に臨み候て誓文確なる心より遺言書と作り候事實正也。歸命頂禮念佛の威力を以て我ら現世に於て日々夜々念々歩々所犯の罪障を消滅して命終決定極樂に生せしめ玉へ。我らもまた娑婆に在て此身に受け候ひし諸々の辱めと悉皆免し申すべく、四年以前檀那寺へ參詣の折節庫裏修費費の中へ加へ候とて無理無体にお辰より金一圓 十錢寄附いたさせ候納所辨長殿の悪業などを來世までは恐み申すまじく候。一我ら所有の動産不動産は下に記す仕方の通り聊か相違なく譲り渡し申すべく候。一我らの姪月瀬梅子には嫁入の贅幣長持料として金

三十五圓其ほかの雜用として金十二圓と與へ申候。と讀む聲の切れぬうち、健二は冷かざる鼻下の眼にてジツと梅子の顔と凝視つてフムと漏す。  
一我らの甥高田宇之助には資本金として十一圓を與へ、三木義信には我ら葬禮の衣服代として金七圓を與へ申し候。一我ら臨終まで常に信切に働かされ候お辰にはエ〜  
と讀みかくるや否やお辰は大聲上げて嗚咽く。利兵衛はまた『何もお泣なざる事はムいません、お静に〜、困りませぬ』とフツ〜言つて讀直す。  
エ〜、信切に働かされ候お辰には我ら病中の介抱の返禮と奉公中實直に候ひし報ひとして我らが所有の残らすの……  
と讀む半ばにゴツホンと咳出たる故、利兵衛は下に置て二三服吸ひ替盆の灰吹に口向け平手翳してゴツホン〜と咳しお辰さん、そんなに此方へ寄て来ては耐りますねエ、エ〜』と復た取上げ

ナニく、我ら所有の残らずの衣類と我らの印形と  
鍵の附属いたし居り候ニツケル側の懐中時計と與へ  
申し候

驚きも極まりては涙出す。聞てお辰は望失ひ落胆して  
利兵衛と見詰め、シリ〜と膝行て遺言書と覗き込む  
一斯く分與いたし候ての發額は假令幾千圓有之候と  
も悉皆我らの跡目相続者に譲り渡すべく候、但し我  
ら春族の中に此後見いたさせ候は誠に〜心許なく  
十萬徳土の旅路の障りと相成り候て、永劫浮び難く  
候へば管理方一切は齋藤利兵衛殿に御委任いたし、  
且つ相続者は利兵衛殿の次男幸次郎に定め申し候事  
以上

讀むはほに聞くはほに一同顔見合せて『エッ……』と  
呆るゝのみ。利兵衛は既に一枚の署名しある所まで讀  
終りたれば將に疊みて阜紗に納めかゝる時、原玄伯は  
周章て摺り寄り辭忙しく『若し齋藤さん〜最うそれ  
限で仕舞ですか、ハテナ〜』と問はれて利兵衛は遺

言書拾くり廻し『オ、是はとんだ粗器をいたしました  
、ナニ紙が足りないで繼たした四半枚が糊り附けや  
うが悪かつた爲め、裏の方へ折れて粘着て居たのと老  
眼で知れなかつた譯でういます、大きに失禮、ヂヤ讀  
ませうナニ〜』

次に我らの長らく治療と受け候ひし醫師原玄伯の  
は我らに無用の薬と多く賣付け候ゆゑ我らの後見人  
に於て薬價を拂はれ候節はよく〜御入念下され候  
て一厘も過分に遺はし無用に候。

此と出たる籤醫玄伯はア、と動頼し『ナニ拂はれな  
い……、こいつア驚く〜、グズ〜して居ては願が  
乾る願ぎだ、オ、斯しちや居られぬ、宅へ販つてチ  
ヤンと精算調製だ、チヨツ妻に話したらまた怒られる  
ぞ家内沸騰散といふやつサ、左うだ曹達が呆れるぞ、  
皆さんお先に』と出て行けば。同じ様に立上る宇之助  
義信『十一圓の資本とは有難い仕合サ』七圓の葬式仕

形とは何の二〇加だらう、雜禮の濟だ後で斯な目録金  
賣つたつて何が買へる、裏服買はない腰が障りになつ  
て伯父さんが、極楽へ住れないなら地獄へでも見物に  
出かければ宜いサ』來玉〜、我々は全体何しに此  
家へ來た〜であつたらう、チヨツ其邊のソレ後見さま  
ばかりが獨で味やる世濟にさはるをさいか『左うとも  
〜オイ一寸見たまへ、誰かも古着一式と鍵のブラ下  
つた上等時計と持扱ひの、商賈往來が聞て呆れるワ』  
アハ、『ソハ、』と打件れて立版る。梅子は俯向き居  
たる健二の肩に手と添て『郎君はナゼそんな心配さう  
な顔なさるノ、夫ヤ妾だつて非常に〜失望ですけれ  
ども、併しよんち都合になつたのですから諦めて服従  
なくてはなりません、さすが健二さん郎君は先日裏  
庭の處で仰有つた事とお忘れではないでせう子』と少  
し消れて問へば健二最と淡泊に『左うサ』と言え限り  
『夫さらばナニ〜戀いでばかり居なさいですか』ア、實

に駭いた杏ん坊だナ具に吝で凝つて居る『イ、エ健二  
さん左うは仰有るけれど、實際口の通りには行ひ得る  
ものでありませんよ、郎君が若し死ぬ時の事と考へた  
らは何ともないものとすワ』前途は遠慮で何うなるか  
豫知し難いが併し僕に伯父さんの襟を具似は出來ない  
から御配慮御無用だ『デモ郎君既往ですもの今更何う  
出來るものですか』左うサ過去だ、ダガ僕は最う愛相  
が盛たよ『エ……、愛相……、誰にぞ』誰にといふ  
人にサ』エ何故です、ナゼそんなら貧富善惡とも死と  
借にするを仰有いました』へー僕はそんな事言つた  
か知らん』エ一言ましたとも〜、エ、情ない、郎君  
の胸に聞て御覽なさい』ハ、是ヤ妙だ愈と妙だ、梅  
子さん僕が一生涯離れないなど言てあつたかも知れぬ  
いけれど、夫は子僕がまだ物で居た時の事だから今日  
只今から見れば本の一時の囈語サ、梅子さんは英學を  
んかやつて居るから疾に知て居るだらうが、泰西の體

に「貧乏神が戸から入れば愛情は窓から逃る」といふ事があるでせう、ネ、よく考へて御覧なさい。縦令貴女と一途になつたところが僕は素より洗ふが如き素寒貧だもの、逆も末の目的が得られないのは勿論氏も育も標致も立派な貴女までが容れられるのは僕如何にも懐手て居られない子、僕の良心が許さないから胸一杯の涙包で否々ながら切出したので、其實決して遺言書の爲めに嫌にあつた譯ではない、またいふも鳴謝がましいが僕は貴女に僕の身も幸も捧げた位だから僅か五十圓足らぬの爲に愛心する者と思はれては甚だ感激の至りや』と我がいふ事のみ述立て健二も同トく歸路と急ぐ。お辰は耳側て始終と聴居たりしが『サア是些とは胸が空た』と聞えよがしに獨言ち、更に梅子に對ひ『お嬢さまお氣の毒見たやうです子、ですから私の言はない事ではないのでせう』喧しいよ、聞たくないから彼方へお出で』イ、エ行ますまい、私はるい

に用がふいます』そんならいつまでもお居、エ、酷い強面い〜』と悲る眼に涙溜め健二の跡を追て行く。残るはお辰たい獨り、佛壇近く進み寄り『ア、口惜い〜、白骨と粉に砕いても飽足らぬ、形見の着物といつたつて何枚あるものか、三年も四年も續けて着た物だもの、潰れ切て居るのを誰一人知らないのは持主ばかり』と云つゝ袖と目と拭ひ『ア、本當に私は梅子さんと同じ愛目に逢た、川島さんが聞たなら定めし健二さんの歸つた様に怒りささるだらう、愛相づかしとされれば私が今まで無心いはれた度に用立たぬ金も其儘になつて仕舞ふだらう、ア、何うした譯で何の報ひせぬの苦み……』

空聲の妄想や萬劫の惡縁とあると悟らぬ渡季の淺積しさ、馳走酒にオハ、と輕薄笑ひして表裏常なきと示す、人情の冷熱はたい夫れ僅かに紙一重の薄さによつて別たれる。

(完)

久瀨宮朝彦親王殿下題字 ○藤澤有岳先生序  
吳春先生岡中川月先生撰寫組畫 ○川本梅崖先生跋

### 一致帖

唐帖仕立頤美裝  
正價 金廿五錢  
郵税 金四錢

- 有栖川職仁親王殿下 ○皇太后宮大夫杉孫七郎君
- 山階宮晃親王殿下 ○尾崎雪濤先生
- 伏見宮文秀女王殿下 ○森 琴石先生
- 從一位嵯峨實愛公 ○長阪雲在先生
- 從一位近衛忠熙公 ○服部紫江先生
- 從一位正親町實徳公 ○清人章壽齋先生
- 陸軍中將島尾小彌太君 ○梁川紅蘭女史
- 農商務次官西村捨三君 ○貫名松翁先生
- 農商務次官西村捨三君 ○沙門鉄翁先生
- 御歌所長高崎正風君 ○魚住荆石先生
- 東京控訴院馬屋原彰君 ○中島照子女史
- 評定官 ○神田半江先生
- 有賀長隣大人

鳥尾得菴居士題字 小牧昌業君題字  
山本憲先生序 中江篤介先生著

### 放言集

正價 金十五錢  
郵税 金四錢

本書は中江兆民居士が内外現時の政況を看破論評せられたる最も快絶にして最も奇絶なる漫言なり  
紫芳散人序 宇田川文海著

### お鈴

定價 金六錢  
郵税 金四錢

北の屋主人序

### 四君子

正價 金六錢  
郵税 金四錢

卷中所收小説四種目次左の如し

- 霜後の菊……………霞亭主人補
- 見入形……………柳塙散人著
- 厚化粧……………紫芳散人著
- のぼり漁車……………仰天童子著
- ……………三味道人著
- ……………振野半醉著

に「貧乏神が斤から入れば愛憎は窓から透る」といふ事があるでせう、ネ、よく考へて御覧なさい。従介貴女と一途になつたところが僕は素より洗ふが如き素寒貧だもの、逆も末の目的が帶來ないのは勿論氏も育も際致る立派な貴女までが醜態るのは僕如何にも懐手て居られない子、僕の良心が許さないから胸一杯の涙包で否々ながら切出したので、其實決して遺言書の爲めに嫌にちつた譯ではない、またいふも鳴鶴がましいが僕は貴女に僕の身も幸も捧げた位だから僅か五十圓足らざるの爲に變心する者と思はれては甚だ氣に「至りや」と我がいふ事のみ述立て健二も同く歸郷と急ぐ。お辰は耳側へ始終と聴居たりしが「サア是些とは胸が空た」と聞えよがしに獨言ち、更に梅子に對ひ「お嬢さまお氣の毒見たやうです子、ですから私の言はない事ではないのでせう」喧しいよ、聞たくないから彼方へお出で「イ、エ行ますまい、私はお

に用がふいます」そんならいつまでもお居、エ、酷い強面い」とと悪る眼に涙溜め健二の跡を追て行く。殘るはお辰たい獨り、佛壇近く進み倚り「ア、口惜い、白骨と粉に砕いても飽足らぬ、形見の着物といつたつて何枚あるものか、三年も四年も経けて若た物だもの、潰れ切て居るのを誰一人知らないのは持主ばかり」と云つゝ袖を拭いて目と拭ひ、ア、本當に私は梅子さんと同じ眼目に逢た、川島さんが聞たなら定めし健二さんの歸つた様に怒りささるだらう、愛相づかしとされば私が今まで無心いはれた度に用立たお介も其儘になつて仕舞ふだらう、ア、何うした譯を何の報ひせよの苦み……」

毫釐の妄想や高揚の頭とあると悟らぬ漢季の淫蕩しさ、馳走酒にオへ、と輕薄笑ひして表裏常なきと示す、人情の冷熱はたい夫れ僅かに紙一厘の薄さによつて別たれける。

(完)

久邇宮朝彦親王殿下題字 ○藤澤有岳先生序  
吳春先生岡中川若月先生撰寫題畫 ○川本梅崖先生跋

### 一致帖

唐帖仕立頗美裝  
正價 金廿五錢  
郵税 金四錢

- 有栖川職仁親王殿下 ○皇太后宮大夫杉孫七郎君
- 山階宮晃親王殿下 ○尾崎雪濤先生
- 伏見宮文秀女王殿下 ○森 琴石先生
- 從一位嵯峨實愛公 ○長阪雲在先生
- 從一位近衛忠熙公 ○服部紫江先生
- 從一位正親町實徳公 ○清人章壽彝先生
- 陸軍中將島尾小彌太君 ○梁川紅蘭女史
- 農商務次官西村捨三君 ○晋名松翁先生
- 御歌所長高崎正風君 ○沙門鉄翁先生
- 東京控訴院 官馬屋原彰君 ○魚住荆石先生
- 評定 官中島昭子女史 ○神田半江先生
- 有賀長隣大人

### 放言集

正價 金十五錢  
郵税 金四錢

鳥尾得菴百士題字 小牧昌英君題字  
山本憲先生序 中江篤介先生著  
本書は中江兆民居士が内外現時の政況を看破論評せられたる最も快絶にして最も奇絶なる漫言なり

### お鈴

定價 金六錢  
郵税 金四錢

紫芳散人序 宇田川文海著  
北の屋主入序

### 四君子

正價 金六錢  
郵税 金四錢

卷中所收小説四種目次左の如し  
○霜後の菊……………霞亭主人補  
○豆八形……………柳塙散人著  
○厚化粧……………紫芳散人著  
○のぼり瀛車……………仰天童子著  
……………三味道人著  
……………極野牛醉著

紫芳散人序

### 三種の色

正價 金六錢  
郵税 金四錢

卷 中 目 次

○貞女鑑……………米、密、笑、史  
○利生の辻占……………大東樓愚樂人  
○紅かさばこ……………榎野半醉

### 芦のよそぎ

正價 金六錢  
郵税 金四錢

此書は府下に有名なる講談師落語家八名が各得意の讀物と熟練なる速記者が筆記したる極めて面白き講談落語總て十種を蒐む

### 小説玉手水

正價 金六錢  
郵税 金四錢

此書は露亭主人、仰天子、桃南子、紫芳散人の四先生が各得意の筆に成りたる小説四篇と收め美麗なる挿畫數葉あり

### ひとつの花

正價 金六錢  
郵税 金四錢

ひとつの花は墨田り常盤、田舎兄弟、撒あたり、岩根の宿、奇縁、二勇婦等の小説を集めて、その味にて其著者はいづれも當今の名家と聞えたる三味道人、仰天子、紫芳散人、梅溪逸史、あや女史、半醉散人等なり

○五明博士輔口演 ○赤坂金藏速記

### 角田川譽の駒

正價 金六錢  
郵税 金四錢

○神田伯龍講演 ○山田都一郎速記

### 正宗孝子傳

正價 金六錢  
郵税 金四錢

○正清齋南麟講演 ○山田都一郎速記

### 江の島土産

正價 金六錢  
郵税 金四錢

明治廿五年五月卅日印刷  
明治廿五年六月三日出版

大坂市南區西櫓町十二番屋敷  
發行者 飯井万助

大坂市東區平野町二丁目廿四番邸  
印刷者 山上貞二郎

大坂市南區心齋橋北詰八十六番邸  
發賣元 明文館



紫芳散人序

### 三種の色

正價 金六錢  
郵税 金四錢

卷 中目次

○貞女鑑……………米、櫻、笑、史  
○利生の辻占……………大東樓、愚樂人  
○紅かまぼこ……………榎野、半、醉

### 芦のよそぎ

正價 金六錢  
郵税 金四錢

此書は府下に有名なる講談師落語家八名が各得意の讀物と熟練なる速記者が筆記したる極めて面白き講談落語總て十種を蒐む

### 小説玉手水

正價 金六錢  
郵税 金四錢

此書は露亭主人、仰天子、桃南子、紫芳散人の四先生が各得意の筆に成りたる小説四篇と收め美麗なる挿畫數葉あり

### むつの花

正價 金六錢  
郵税 金四錢

むつの花は墨江の常盤、田舎兄弟、撥あたり、岩根の宿、奇縁、二勇婦等の小説を集めて、むつの花にて其著者はいつれも當今の名家と聞えたる三味道人、仰天子、紫芳散人、梅溪逸史、あや女史、半醉散人等なり

### 角田川譽の駒

正價 金六錢  
郵税 金四錢

○五明樓玉輔口演 ○赤坂金藏速記

### 正宗孝子傳

正價 金六錢  
郵税 金四錢

○神田伯龍講演 ○山田郁一郎速記

### 江の島土産

正價 金六錢  
郵税 金四錢

○正統齋南野講演 ○山田郁一郎速記

明治廿五年五月卅日印刷  
明治廿五年六月三日出版

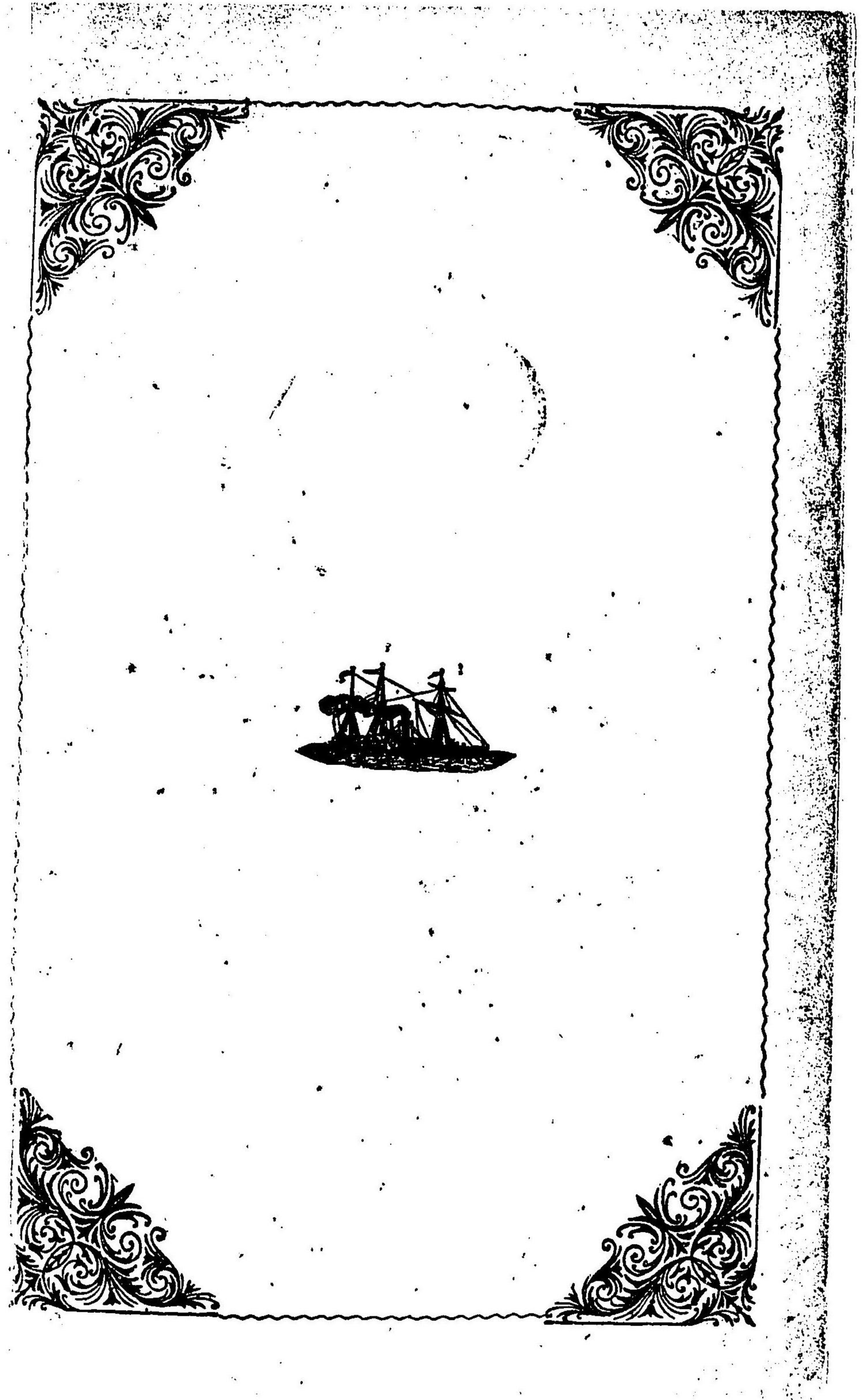
版權登錄



大坂市南區西橋町十二番屋敷  
發行者 飯井 万助

大坂市東區平野町二丁目廿四番邸  
印刷者 山上 貞二郎

大坂市南區心齋橋北詰八十六番邸  
發賣元 明文館



2



特13  
893

四季の花  
国立国会図書館

205165-000-6

特13-893

四季の花

明文館

M25

EDV-0179

